
マゲ・メル～約束の国～

羽月 美優

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マグ・メル〈約束の国〉

【Nコード】

N3798A

【作者名】

羽月 美優

【あらすじ】

内乱で疲弊したダーナ国は確実に傾いていた。大陸の端の半島で育ったミランは、伝説の水の賢者の再来としてある日王都へ召集される。何も分からないまま村を出るミラン。しかし王城に赴いた彼に示されたものは、過酷な選択肢だった。「ウシユク・ベーハー」「不敗の剣」「約束の国」交錯する全ての謎の鍵を握るのは、水の賢者。まだ知らぬ自分自身を捜し求め、苦難の末に彼が選ぶ道は果たして。。。

第一章：プロローグ

遙か古の時代、大国ダーナ創建の折、王の傍らには4人の賢者がいたと云う。

彼らは自然や精霊と対話し、その力を借りることで不思議の術を操った。それは今はもう忘れ去られるばかりの、古の秘術。

そして彼らは各々の性質に合わせ、火・水・風・土の四大元素を操った。

その不思議の術で、ただ荒れるだけのこの世界を平穏へと導いた。王はその功績を称え、彼らに土地を賜った。火を操りし者には、火の精の多い砂漠の地を。水を操りし者には、水清き潤沢なる地を。風を操りし者には、良き風の通る開けた地を。地を操りし者には、緑多き恵みある地を。

彼らは国が安定した後、各々の治める地に戻り陰ながら国を支えた。国の危機には再び四方の民は集まり、その象徴たる印章に賭けて国を守るという誓いを残して。

そして彼らが死した後も、その子孫が土地と意志と力を守り続けた。

しかしそれは、遙か昔の物語。

神話と入り混じる、謎に満ちた太古の記録。

今はもう信じる人さえ少ない伝承だが、それは確かに今も王家と四方の民に受け継がれているという。

第二章：はじまりの歌

カウカス大陸の東の端にあるリベル半島には、伝承に残る四賢者の一人、フラッド・スウォールの末裔と目される一族が今なおその勢力を失わずに生き続けていた。彼らは、始祖フラッドが水を操る術を得意としていたことから、現在『水の民』と呼ばれている。そして彼らの住まうフスク村は、水の恵み豊かなりベル半島の中でも特に清く澄んだ水を豊富に持つため、「水の里」「生命の泉」とも呼ばれていた。

夏が本格的に始まる前には、周囲の村々を交え、水が尽きぬことを精霊に願うウールという祭りが催されたりと、人々は王都から離れたこの地で穏やかに暮らしていた。

「あ、その旗はこっちの柱に一緒に立てて下さい。そっちの樽は祭礼用ですから、まだ倉庫の中がいいと思います」

祭りも間近に迫った風待月の半ば頃、村の中心の広場では、ウール最大のイベントである水を願う舞を舞う為の舞台を村人が総出で準備していた。その中でも、16歳程の少年が村人の質問に丁寧に答え、全ての進行を指揮していた。

「足場は出来たぞー。どうするミラン、先に屋根作っちゃうか？」

「あ、そうですね。お願いします」

金槌片手に振り返る筋肉質の男に、ミランはこくりと頷いた。その拍子に肩にかかった青い髪がさらりと落ちる。水の民と呼ばれるだけあって、フスク村には水の精にも例えられるような青い髪や瞳を持つ人が多い。全員がそうだとは言わないが、かなりの多さで青みがかかった色を持つものがいるのが特徴だ。ただその中でもミランの髪と瞳の青さは飛び抜けて濃く澄んでいる。肌は半島人の特徴で白いから、肌と髪・瞳との白と青の対比が美しく、その美しさ故に『

精霊の愛し子』とあだ名するものまでいる。

「今年の舞手はミランだった?」

「あ、ラグさん。はい、母さまもいい機会だからって言って、率先して衣装を縫ってます」

ラグと呼ばれた20代後半ほどの青年が、話しかけながらミランにハーブティーの入ったカップを手渡す。ミランは礼を言っただけを受け取ると、こくこくと喉に流し込んだ。指示を出し続けていたせいか、思った以上に喉が渴いていたらしい。あっという間にカップは空になってしまった。

「まあ、族長のとこの一人息子だもんな。もつと小さい頃から舞手として舞台上立っててもおかしくなかったんだが」

「・・・あ、えと。はい、そうですねー」

何気ないラグの呟きをミランは笑って流した。

「今年はこの村でさえ水が少なくなっているからな・・・。期待は大きいぞ?何と言ってもフラッド・スウォール直系がようやく舞うわけだからな」

「・・・そう、なんですかー?うわ、期待を裏切らないように努力します」

自信なさそうにミランは微笑んだ。

「あ、そのことで僕じいさまに呼ばれてたんだ。ごめん、ラグさん。後頼んでもいいですか?」

「舞台の設営は大体終わってるからな。ま、オレでも大丈夫だろ」

「良かった。じゃあ、お願いします」

ミランはぺこりと頭を下げるとカップを近くの樽の上に置いて、高い丘の上にある村長の家を目指して走り出した。

*

*

「じいさま、遅れてすみません」

ミランが顔だけひよっこりと祖父の部屋に出すと、部屋の中では入口に背を向けた祖父が水の満ちた盆を覗いていた。しかしミランの声を聞くとくるりと振り返った。

「なに、かまわんよ。入りなさい」

「はい」

促されて部屋の中央のいすに座る。そのすぐ前のテーブルには今しがた祖父が覗いていた水盆があった。

「水占をしてたんですか？」

首を傾げて向かい側に座る祖父に問う。祖父は水を通して未来を読む占い師であり、祭りに良い日取りなども彼が水占で決めていた。

水占はほぼ百発百中だが、そのかわり精神力も体力も消耗が激しいのであまり頻繁には占わない。祭りの日取りを決めたのがごく最近のことだから、また水占をするのはちょっとおかしい。

「うむ。気になることがあつての」

ミランの問いに祖父はさらっと答えた。何の問題もないと言わんばかりのあっけなさに、ああこれは知らなくていいことなんだと納得した。

「それはそうと、ミラン。舞の方はどうじゃ？」

「あ、大丈夫です。舞自体は小さい頃から見て覚えていたし、あとは衣装に躓いたりしなれば・・・多分」

「・・・・・・・・すまんう」

「え？」

「幼い頃からおまえを舞わせぬようにと、権限を使って避けてきたが・・・・。今更になって多くの人の前で舞わせねばならんとは」

「・・・・・・・・」

昔から祭りで精霊に捧げる舞を舞うのは一族直系の者に限っていた。それはスウォール直系の血に流れる力が特別であつたからである。

だがそれも遙か昔のことで、今となつてはその直系も普通の村人と大差ない力しか持たない。稀に祖父のような占いに長けている者や

水の流れを知ることの出来る者もいるが、それだけである。精霊と対話し力を借りるなどということは夢物語であった。だから今は形式だけで祭礼が行われているのだ。そしてだからこそ、祖父も一族もミランが舞うことのないようにと毎年根回しをしていた。舞えばミランは普通の子ではいられない、賢者の再来と祀り立てられるだろうと知っていたから。それが同時に、今の時世では命に関わるかもしれないと感じていたから。

「国が・・・傾いているからやも知れんろう。おまえのその力は」「水が枯れてきているのも、その所為・・・なんですか？」

「おそらくは。儂よりもおまえの方が分かっているはずじゃろう」
重々しく頷く祖父を見て、ミランは俯いた。

近年の王家の争いで国は疲弊しつつある。王都から離れたこの半島にはその余波はあまりないが、それでも水が枯れるという異常事態が起こってしまった。国が平穩を保っていた頃にはありえなかったことだ。

国が倒れかけている。そしてこの国を守護する精霊たちが苦しみ嘆いている。

水が枯れるのはその先駆けだ。

「・・・はい。声が、聞こえるから。精霊たちの、気を付けてと忠告する声が」

「『精霊の愛し子』か・・・。もうこの里でもおまえしか水を呼ぶことは叶うまいて。始祖と同じ力を持つおまえにしか・・・」

「・・・」

「ウシユク・ベーハー」

「？」

「・・・この世でただ一人、生命に関与出来る者か・・・」

「じいさま？」

悲しそうに呟く祖父の様子がいとも違う気がして何だか不安になった。それに呟いたことの意味が自分にはまだよく分からない。

「おまえの力は他の何者にも代わってやれない。けれどその力がお

まえに現れたのには意味がある。だから決して、力を厭うてはならんよ」

幼い子供に言い聞かせるように、低く優しい声で語られる言葉に、ただ素直に頷いていた。

その言葉に一体どんな意味が込められているかなんてわからないまま。

祖父の部屋から出た後も、その言葉の意味を考えたのは少しだけで、すぐに心は間近に迫る祭りの方へと傾いていた。

遠ざかる足音を聞きながら、祖父は水盆の中を再び覗き込んでいた。普通の人にはただ水がたゆたっているようにしか見えないそれは、彼の目には未来を映す鏡も同然。見える未来に、彼は深く溜息をついた。

「もはや世界は止まらぬか・・・」

眩き、盆の水を右手で掻き回す。

「儂に見れるのはここまで・・・。未練だのう」

長く白い髭を撫でながら盆から視線を移し、遠い空を見上げる。

「辛い宿命を背負った『精霊の愛し子』たちが、その重責に押し潰されぬよう祈るのみか」

かすかに村の中心から聞こえる村人たちの笑い声に、懐かしむように愛しむように、ただ静かに微笑んで耳を傾けた。

第三章：水の賢者

祭りの当日は稀に見ない人の多さだった。

やはり水の豊かなりベル半島でも水が枯れ始めている所があるのだ。いつもはほんとに近所の村を交えて催される祭りなのに、半島の端の村や大陸内部の人たちが集まってきている。

たかが小さな村の祭礼に何故と思うが、どうやら過去に力あるスウォール直系が舞った際、半島だけでなく大陸内部でも雨が降ったり、泉が湧き出したりと、水に関連した奇跡と呼ぶしかない事象が起ったという記録があるからその為だろう。

だが実際にその記録を信じて祭りにやってきた人というのは、おそらくほとんどいないのではないだろうか。すぐれるものがあるのなら藁でもすぎる。要は自己満足の為の行動だ。

それはともかくとして、例年にない祭りの盛り上がり村人はおおいに浮かれていた。

「店主、申し訳ない。伺いたいことがあるんだが」

広場で酒を売っていた酒場の亭主が声を掛けられ振り向くと、人懐こそうな笑顔の青年がハニートロンドの髪を風に揺らしながら舞台を背に立っていた。

「見ない顔だね。大陸の方から来た人かい？」

「ああ、私がいる所も早魃が多くてね。今年は久々にスウォール直系男子が舞うらしいと聞いてやって来たんだ」

「そうかい。あんた、そりや幸運だ。今年舞うのは族長のところの人息子で、容姿からして『精霊の愛し子』と呼ばれる程水の精に近いな。特別な力なんて期待してないが、あいつが舞えばもしかすると精霊も喜んで雨を降らせてくれるかもしれねえとみんな思ってるよ」

まるで自分の子供を自慢するような口振りに、青年は口元を緩めた。

「『精霊の愛し子』か。それは凄い。いつ舞うのかな？それを聞きたかったんだが」

「もうすぐ始まるだろ・・・お！来た来た！あんた後ろ見てみな、舞手が舞台上に上ったぞ」

店主の嬉しそうな声につられて振り向くと、いつの間にか舞台の上には深い泉のような色の髪少年が、ひらひらした舞手特有の祭礼衣装を纏って立っていた。

舞台上には屋根があつて、これは祭礼の途中で雨が降つた際舞を妨げないようにと作られているものであるが、それによりわずかに陽の光が遮られて、少年の髪は底の見えない泉のように真つ青に見えた。

その青さたるや、本当に精霊が間違つて人間の子供として生まれてきたのではないかと思うほど、現実離れた美しさだった。

「成る程・・・これが、スウォール直系。確かに数百年来見ることのなかつた青さのようだ。文献の記述とも合致するな・・・」
舞手の登場に盛り上がる広場の喧騒の中、青年はぼつりと呟いた。
まだ更に何かを考えようと俯きかけていたが、次の瞬間聞こえてきた音色に思わず顔を上げる。

この舞には楽器による音楽の演奏はついてないはずだった。けれど聞こえてきたのは、なんと美しい天上の調かと思うほど、繊細で美しく澄んだ旋律。

これに驚いているのは青年だけではないようで、周囲を見渡せばフスク村の村人でさえ、呆けたように口を開けたまま舞台上を凝視している。

もう一度舞台を仰ぎ見れば、何かを口ずさみながら軽やかに舞う少年の姿。

そう、その音色は歌声。

セイレーンのような、人を魅了し離さない力ある歌声だ。

皆がその歌声に呆然と聞き惚れる。が、やがてぼつりぼつりと頬を打ちだした冷たい雫にはつと我に返る。

「み・・・水・・・？」

「雨だ！雨が降り出した！！」

誰が叫んだのかは分からないが、その声につられて皆が天を仰げば、その瞬間を待っていたというかのように、一斉に雨が降り出した。

空に雨雲はなく、太陽がのぞく晴天なのに、雨が降っている。

日の光が雫に反射し、無数の小さな虹が天にかかる。

それはまさに奇跡としか言いようがない光景。

「あ！精霊??！」

一人の声にまたも広場に集まる全員が声の指す方向を振り向いた。

舞台を見れば、舞っている少年の周囲を、青く透き通った人の形をしたものが少年を祝福するかのようにくるくると舞っている。ただその精霊は見える人と見えない人がいて、見えている人はそのほとんどが少なくともスウォールの血を継いでいた村人であった。

「・・・まさ・・・か・・・。本当に奇跡が起こった・・・」

呟いた声は誰のものか。

分からなかったけれど、きっとその場にいた皆が同じことを思っていただろう。

やさし流れ緑なす 岸辺に立ち歌いしは

尽きぬ恵みを願う歌

清き流れすべりゆく 風に散りてきらめきぬ

白き花の囁く調

流れゆく 水の音の静けしや

君が夢路やすかれと 流れに寄せ祈る身は

ざあざあと降る雨の中で、消されることなく響く歌はどこまでも優

しい。

軽やかな舞はまるで水の精霊が戯れているかのよう。

踏み鳴らすステップと共に、水の恵みに喜ぶ緑が揺れる。

まるでダイヤモンドのように光を乱反射させて煌きながら降る雨を、ミランの祖父も丘の上の家の中から見ている。目を閉じ意識を集中すれば、今この村にどれだけの精霊が集まっているか分かる。彼らがどれほどの祝福と愛情を、愛しい孫に向けてくれているのかが。出来れば孫の晴れ舞台を、最初で最後のこの機会に是非目に焼き付けておきたかったけれど、どうやらそれも出来そうにない。

「秒針が時間を刻み始めたようだ・・・」

ためらっている暇はない。懐かしんでいる暇も、感傷に浸っている場合でもない。

できることをやらなくては。

窓の外に向けていた視線を後ろ髪引かれる思いで無理矢理戻し、手前の水盆を覗き込む。

そこには広場で酒屋の店主に話しかけていた青年がはっきりと映っていた。

水鏡の中の彼は今とは違う、上等な衣装を纏ってミランの前に立っていたけれども。

それはもう少し先の未来。

今広場にいる彼は、誰もが感嘆の声をあげる中一人微笑んでいた。

「見つけた。『水の賢者』」

そしてひっそりと天を仰ぐ。

この日、大陸全土に奇跡の雨が降った。

*

*

自分が記憶する限り、こんなことは何十代も前の祖先以来だと思う。

何かの間違いだと思いながら、ミランは祖父の部屋で見知らぬ青年と向かい合っているこの状況に激しく動揺していた。祭りもなんとか終わってゆっくりしていたかったのに、村人たちにやっと解放されて家に帰ってみれば彼がいたのだ。

「え、と……。すみません、よく分からなかつ……。た、んですが」というより脳が理解するのを拒否した感じた。ミランは困ったように笑って目の前の金髪の青年に聞き返す。

「長く定まらなかつた王位が先頃定まりました。つきましては、我が王は伝説に名高い四賢者のお力をお借りしたいと望んでおられます。是非私と共に王都に来て頂きたいのです」

渋い顔もせず青年は同じことを繰り返す。

「でも、あの……。ソラス卿？」

「クラウ・ソラス。どうぞクリスとお呼び下さい、ミラン殿」

につこり笑う彼は広場にいたときは違って白い軍服に身を包み、ミランの前で片膝をついている。明らかに身分も実力も高そうなクリスに傳かれて、ミランとしては胃の腑がひっくり返りそうなほど居心地が悪い。

「じゃあクリスさん。王様が呼んでいらっしゃるのは、賢者に値する方なんでしょう？それじゃあ、僕ではありませんよ。僕は賢者なんて凄いいものじゃないですから」

「いえ、貴方は間違いなくかの水の賢者の再来です。貴方こそ我が王が捜し求めていた方に相違ありません」

「僕は」

「フラッド・スウォールの血を最も濃く受け継ぎ、すでに失われて久しい精霊術を行使出来る唯一の水の民じゃよ」

反論しかけたミランよりも早く、祖父がきっぱりと言い切った。

「おぬしも見たとおり、その力は始祖フラッドと同じじゃ。そして精霊に誰よりも愛されておる。印章もミランを持ち主と認められた」

「じいさま！！何のことですか？！印章なんて僕知らな……」

てつきり自分の援護をしてくれると思っていた祖父が予想外のこと

を言い出したので、慌てて後ろにいる祖父を振り返る。そして、えっ?!と声を詰まらす。

祖父の掌の上には代々スウォール家に受け継がれてきた青い印章が、箱に収められたまま仄かに光っていた。

かつて王から四賢者に与えられたという印章は、特別な鉱石で作られたこの世に二つとないもの。スウォール家に継がれてきた印章は、清らかな心を意味するユーチャリスの花が刻まれ、誠実・慈愛の象徴たるサファイアを模した美しい青い石で出来ている。

無論ミランも何度となくその印章を目にしてきた。けれどこんな風に淡く輝いているのは見たことがない。驚いて凝視していると、祖父がその印章を取れという仕草をした。

何だろうと思いつながらミランが両手を差し出し、その掌に印章を受け取った瞬間、印章が更に強い輝きを発した。

「わっ?!な、何!?!」

一瞬ビリッと印章が振動した気がした。

「この通り。儂が知る限りこの印章が輝いたのは、ミランが生まれた時以来じゃ」

印章はもとは一つの特別な鉱石を四分したものだ。四賢者の持っていた印章は常に仄かに輝いていたと言われている。

「精霊の力に反応するのです。ですから力が強ければ強いほど輝きは増し、光は失われません。そしてその印章は、かつての四賢者の為だけに作られた特別品。彼らと同等の力を持っていると認められたものにしか輝きを与えることは不可能。・・・ミラン殿、少々その印章をお貸し願えますか?」

差し出される手になんのためらいもなく印章を置く。するとその瞬間に青い輝きが消滅してしまった。光がなくなってしまうほどの青い石だ。自分が今まで見てきたのも、このように何の変哲もない石だったはずだ。

「このように力を持たぬ者が持てば、ただの石でしかない」

ありがとうございました、と言ってクリスが印章をミランの手に戻

す。すると再び印章は青く輝きだした。

「貴方が水の賢者であることの動かぬ証拠です。他の者ではこの輝きは出せない」

「でも今まで僕が見たときは光ってなんかいなかった」

「その時は誰かが印章を手を持っていませんでしたか？」

「え？」

「貴方が生まれた時から輝きだしたと言うのなら、その瞬間に印章は持ち主を貴方に定めたはずです。でしたら他の水の民で如何に力があるうとも、持ち主以外が持てば光は消えます。思い出してください、誰が印章を持っていましたか？」

問いかけられて必死で記憶を探り出す。

印章は一族の大切なものだ。めったに見ることはない。常の管理は一族の長、この場合は祖父がしているはずだ。

そういえば、見せてもらう時はいつも祖父が手に持っていた。

「じいさま・・・」

確認するように視線だけで問えば、かすかに頷かれた。

「まだ幼かった貴方が余計な重圧を抱えないようとの族長殿のご配慮なのでしょう。ですがこれで、確実となりました。ミラン殿、私と一緒にどうか王都へおいで下さい」

深々と頭を下げられて困惑した。

どうしようかとおろおろしていると、ぼんと肩をたたかれる。

「じいさま」

「明日の昼には出立させましょう。今夜はもう遅い。こちらでも用意がありますので、ソラス卿には一度宿に戻って頂いて、明日またいらして頂けますかな？」

王都へ発つことには承諾してもらえたようだと言った心の中で安堵し、クリスは腰をあげた。

「はい、勿論です。では明日の昼にまたこちらに伺います」

微笑んで一礼してから部屋から出るクリスを二人は黙って見送る。

何もかもよく分からない。賢者の再来？王都へ行く？

今まで力を隠してそれなりに穏やかに過ごしていたのに、何故今になつてこつても事態が一気に進むのだろうか。

「何で・・・何で行くと言つてしまつたんですか？僕王都へなんか行くつもりがないのに」

駄々をこねてる子供みたいだと思ひながら、それでも出てくる言葉を止める気はなかつた。

しばらく黙つて外を眺めていた祖父がふと視線を部屋の中へ戻す。窓の外にはクリスが村の中心へ坂を下つていく後ろ姿が見えた。

「仕方ないんじゃないよ。行くと答えても行かぬと答えても同じこと」ならばせめて何の心配もなく旅立つて欲しいと思つのは、孫を思つ祖父の心というもの。

己の口から真実を告げる気はないのに、そんなことを思つのは少し心が痛んだけれど。

ミランの目の前まで歩み寄つて、見上げるその額に優しく手を置く。「簡略ではあるがな。今この時をもつて、我の継ぎし古の約定を、正統なる血の主へと継ぎ渡す。汝名をミラン・フラッド・スウォール。印章に認められし者よ」

手の押し当てられた部分が熱いと思つた。同時に手の中の印章が一瞬発光する。

そして光が収まつた時、祖父が額から手をどけた。

「今のは・・・」

「これで今からおまえがスウォールの族長じゃ」

「えっ！？何ですか！」

「王都へ赴く者がただの水の民だというのもおかしいじゃろうが。ましてあの卿に水の賢者などと呼ばれる者が」

儂も年をとつたしこの、と軽い調子で続ける祖父の様子に呆気にとられる。

つまりは体裁を整える為か。そんなことのために族長権限を移してしまつていいのだろうかと思ひが、なんとなくそれだけではないよな気がした。

「ミラン」

訳の分からない焦燥感に戸惑っていると、先程とは打って変わった
声で名を呼ばれた。

あまり見たことのない厳しい表情に思わず息を詰める。

「王都へ行けばおまえは一人じゃ。これから先、儂らはおまえを助
けてやることは出来ん」

「……………」

「すべての判断もおまえ一人で下さなくてはならん。どんなに厳しい
選択肢でも、選ぶのはおまえしかいないということ覚えておき
なさい」

「……………はい……………」

族長となる為の心構えだろうかと思った。

「……………だが、おまえを支えられる者も必ず近くにおる。おまえ
と同じ運命を背負った者と出会うじやろう。彼らを大切にしなさい」

「……………誰ですか、彼らって？」

「おまえと同じ精霊に愛されし者たち。彼らを信じることを恐れて
はならん」

言っている意味がさっぱり分からなかったが、多分これは水占で見
た未来への忠告なのだろう。直接的に未来を語ることは許されない
から、あくまで遠回りにしか言うことができないのだ。とりあえず
ミランは祖父の言葉に素直に頷く。

「……………そして……………。いつか儂ら水の民と何かを秤にかけねば
ならぬ時は、儂らを選んではならんよ。民を守る為に、その手を汚
すことはおまえには出来んじやろうて」

そして自分たちの為にこの孫が苦しむ姿も見たくない。

まだ言われることを理解できていない表情のミランを見て微笑み、
その手を両手で包み込むように握る。

まだ成長途中の未熟な手。

この手は何かを傷つける為にあるのではなく、慈しみ守る為にある
のだと信じている。

「儂らは、自分の身は自分で守る。だからおまえは、おまえの信じ
ることをやりなさい」

未熟で幼いこの掌に守られるだけの枷ではありたくない。
残せるのは言葉だけ。

だからどうかこの言葉を、胸に留めておいてくれることを切に願う。

「儂らはおまえを信じておる」

「じいさま……?」

手を離し、もう一度見上げるミランの頭に手を載せる。

「皆おまえを愛しておるよ。だから迷わずに選びなさい、進むその
道を」

大切な大切な、未来と言う名の愛し子よ。

進むその先に辛いことばかりじゃないことを、ただひたすら祈って
いる。

「さあ、もう寝なさい」

ぼんとミランの頭をたたいて部屋の入口へと促す。

いつもと違う様子の祖父を気にしてためらうミランだったが、優し
いが有無をいわせぬ強さで背を押され大人しく部屋を出る。

「おやすみ、ミラン。良い夢を」

一言一言をかみ締めるかのように言われる言葉に胸が詰まった。

「……おやすみなさい」

何を返していいか分からなくて、迷った末にそれだけ言った。

何故だかとても悲しくて泣きそうになったから、慌てて祖父に背を
向けて走り出した。

次の日の出発には村人総出で見送りがされた。

長旅になるかもしれないからと食糧や薬、衣類などをたくさん持た
せてくれた。

みんなで見送ってくれるのは、族長になったからだろうかと微かに
考えたが、それにしても何故かあまり活気のない様子だ。中には泣

き出してしまふ人もいた。

旅立ちの瞬間、いつてきますと言ったら、皆それぞれ「いつてらっしゃい」とか「気を付けて」とか「元気でね」と返された。

笑顔で手を振ったけれど、何故かみんなの笑顔が頭から離れなかった。

頭の中で響く警鐘が何かを告げていたけれど、そのまま馬車を飛び降りるわけにもいかず、何度も何度も村を振り返りながらいつしか村は見えなくなった。

第四章：引かれし者たち

「くそおつ！仲間の仇！！」

自らを鼓舞するように叫んで飛び出してきた男は、振り上げた剣を目の前の青年めがけて勢いよく振り下ろそうとした。

「誰が仇だ。先に手エ出したのは、そっちの方だが」

しかし渾身の一撃はあっさりとかわされ、青年は地に着いた剣を横から足で蹴り飛ばした。

鈍い音がして男の手から剣が吹っ飛ぶ。

離れた所に落ちた剣を視線で追って、取り戻そうと身体をそちらに向けた瞬間、みぞおちにすさまじい衝撃を感じて男は気を失った。

どさりと倒れる男を足蹴にして、青年はきよるきよると辺りを見回す。追撃の心配をしていたのだが、どうやらこの男は無謀にも一人で突っ込んで来たらしかった。

長布を巻いた頭部から無造作にはみ出す赤い髪を撫で、おもしろくもなさそうにその場をあとにする。王都に入ったあたりから殺気を感じていたので、おびき出そうとわざと人気のない路地に入ったのだが、出てきたのはたいしたことない雑魚だった。

「これで王宮騎士だってんだから、ふざけてる」

チツと舌打ちして青年は大通りへと足を向ける。

村から王都に着くまで、ずっと同じように後をつけられ闇討ちよろしく斬りかかれてきたが、どれもやっぱりたいしたことにはなかった。

「これなら村の方も放っておいても良かったか……」

「私たちは大丈夫だから。下手にこっちから手を出して、倍返しでもされたら困るでしょ」

そう言って止めたのは子供の頃から一緒だった、幼馴染の少女。

どうやら自分の心配をしてくれていたらしいが、結局言うことを聞かずに村を遠巻きに包囲していた騎士連中を根こそぎ倒してしまっ

た。別に後悔はこれっぽっちもないが、弱いものいじめをしたかのようで少々気が滅入る。

「どっちにしろやり方が気に入らなかつたから、結果は同じか。それにしても湿っぽいな、ここは・・・火の精が少ないのか？」

こんな所に住むのはごめんだな、と思いながら複雑な路地を通り抜ける。初めて来た土地だから道なんて分からなかつたが、そのうちでかい通りに出るだろうと楽観視してぶらぶらと歩く。そうこうしているうちに、背後で蠢く幾つもの気配を感じた。

隠しきれない殺気が、相手がどこにいるかを明確に告げてくる。でも殺気を隠しきれない時点で雑魚決定、なんて考えながら青年はおびき出す場所を探し、路地の角をあっちへこっちへと曲がる。

出来れば袋小路のような所がいい。そうすればきつと、殺気を放っている奴らもチャンスとばかりにぞろぞろ姿を現すだろう。

「ちまちま倒すのは性に合わねえからな」

次の角を左に曲がった所で、丁度探していたような広めの袋小路に出た。

よし、と内心呟いてくるりと後ろを振り向く。

振り向きざまに、壁に隠れ損ねた反射神経の鈍い何人かの姿が見えてわずかに落胆した。

どうやらまた、その程度の雑魚を相手にしなければならぬらしい。

「・・・つたく。態度と位だけはバカみてーに高い割りに、このザマかよ。おい！さっさと出て来いよ！わざわざこんな場所まで来てやったんだ。まさかココまで来て、誉れ高き王宮騎士が怖気づいたとか、言うんじゃないだろうなあ！」

わざと彼らのプライドを刺激するように発破をかける。

すると挑発にのつた騎士たちが、剣を片手に構えながらぞろぞろと現れた。

「火の民の族長、だな」

30代半ばくらいの一人の騎士が、呻く様に言いながら青年を睨み付ける。常ならばこの眼光で相手の戦意を喪失させているのかもし

れないが、生憎と青年にはまったくもって無意味だった。

「なつたばかりだけだな。というより、なる気はなかつたんだ。てめえらのバカな上役がウチのジジイに手出しさえしなけりゃ」

出入り口を塞がれ、何人もの騎士に囲まれながら、平然と腕を組んで余裕の表情。

「騎士団の小隊長に向かつて、なんたる口のききようだ！しかも我らの同士を卑怯にも殺しておいて！」

「どの口でそんなコト言つてやがる。先に手エ出して来たのは、てめえらだぞ」

ゆらりと青年の後ろで景色が歪む。

途端に騎士達はビクリと怯えて、慌てて剣を構えなおす。そんなことをしても無意味だというのに。

「反省つて言葉を知らないらしいな。折角だ、そのムダに高い鼻っ柱を叩き折つて、敗北の二文字を骨身に染みて分かせてやるよ」

にやりと凄絶に笑つた瞬間、青年の周りを取り囲むように焔の渦が現れた。

焔の明かりに照らされて、青年の紅い瞳が更に赤く染まる。

「よく覚えとけよ。誇り高き火の民に楯突いたこと、死ぬほど後悔させてやる」

青年のその言葉を合図に、焔の渦が一齐に騎士達へと襲い掛かった。

*

*

「もうすぐ王都に入りますよ。お疲れではないですか？」

どうぞ、と微笑みながらクリスがホットレモンティーを差し出す。

なんだか少し寒く感じていたミランはありがたく両手でカップを受け取った。

「ありがとうございます、大丈夫です」

ガタガタと揺れる馬車の中から、ちらりと外を覗く。

夏も終わりだというのに、リベル半島に比べここはかなり寒かった。植物も見たこともないような種類が多い。おそらく寒い気候に耐えられる植物ばかりなのだろう。

暖かい土地から来たミランは、王都が近づくにつれ寒さで震えることが多くなっていた。

今も入り込んだ隙間風に微かに身震いをする。

「寒いですか？もう一枚毛布をお掛けしましょう」

「あ、いいいいいえっ！大丈夫です！今でもたくさん毛布を貸してもらってるのに、これ以上借りたらクリスさんの掛けるものがなくなっちゃいますー！」

既に着膨れ状態のミランに更に毛布を掛けようとするクリスを、慌てて手を振って押しとめる。

「構いませんよ。私は王都で育ちましたから、寒さには慣れているんです。それに夜こそ寒いですが、昼間は暑いくらいですよ」

「・・・あ、暑い・・・ですか・・・？」

「ええ」

どこらへんが暑いのだろう、と眉根を寄せて考えていると、もう一枚毛布がかぶせられた。

「元々暖かい土地から来た貴方には厳しい場所でしょう。それに今日は曇っていていつもより気温が低いようです」

言いながらミランの持っているカップに追加のティーを注ぐ。こんな風に彼は、道中ずっと甲斐甲斐しく世話をしてくれていた。ミランが何か言わなくても先に気付いてくれて、当たり前のようにやってくれるから、つい甘えてしまう。それがまた義務的にしてくれているのではなく、どうやら性分としてそうらしい。実にスマートに何でもこなしてしまう。

「どうしました？」

「え？！」

急に問いかけられて、思わず声がひっくり返る。

「いえ、こちらを凝視してらしたので。何かお気に障ったのかと」

「と、とととんでもないです！そんなんじゃないです！いつもながら何でそんなに色々気が付くのかなー、と思って。それに動作がいちいち優雅ですよねっ！」

いちいち余計だった、と内心で激しく後悔する。

そんなミランの動揺をよそに、一瞬目を丸くしたクリスは白い軍服も爽やかに、にっこりと笑って見せた。

「いつも、ということとは、ずっと見てて下さってたんですか？それはそれは、光栄ですね」

「え？！や、わ、あう、わわわ！別に他意はないです！村の女の子がよく、金髪の美形騎士に大切に扱われるお姫様になりたいって話してたから、クリスさんはその理想にぴったりじゃないかと思ったりなんかして」

「ミラン殿はぴったりだと思われたのですか？」

「え、と・・・」

「私は貴方を守るべきお姫様として、お仕えさせて頂いてました」「！！！！？？？ば、僕、男です！！！」

「はい。でも、女性よりもお美しいですよ。普段はむさ苦しい男連中に囲まれていますから、今回のお役目は私的に嬉しい限りです。役得ですね」

「・・・ツツ！！！！？」

言葉も出ない程驚いて顔を真っ赤にするミランを見て、クリスが堪えきれずフツと噴出した。手で口を押さえながら、肩を震わせてくつくつと笑い続ける。

「・・・からかって遊んでますね？」

まだ顔を真っ赤にしたまま、悔しそうにクリスを睨む。睨むといっても、その目は拗ねた子供と同じだ。

「・・・は、はっはは。く、くくく・・・す、すみません。っ
い
い」

「つい、でからかわないで下さい」

真面目に言い返したら、更に笑われた。

彼にもこういう面があるのだということを知ったのは、旅も半ばの頃。最初こそ互いに遠慮ばかりだったが、ほとんど一緒に馬車の中にいけば自然とよく話すようになった。

そして話していれば、どんな人かというのはなんとなく分かるもので。

「……意外に意地悪いですよね……クリスさんて……」

「そんなことはありませんよ。これでも私は真面目で誠実な騎士で通ってるんです」

「じゃあ、何ですぐ僕をからかうんですか?!」

「反応が楽しいから……ですかね。馬車の中は暇ですから、楽しい方がいいと思いませんか?」

楽しんでるのはそつちばかりな気がしますけど。思わず口をついて出そうになる反論を慌てて飲み込む。反論したところで、どうせまた笑われるか揚げ足をとられるかのどちらかだ。さすがにミランも学習していた。それでも溜息と共にちよつとした文句が出るのは見逃してもらいたいものだ。

「……騎士の人って、みんなこんなのかな……」

「どついうイメージを持ってらっしゃるのは分かりませんが、騎士だって人です。笑いもすれば冗談だって言いますよ」

「聞いてたんですか」

「聞こえてきたんですよ」

にっこりと、まったく悪びれもせず微笑む。その姿はドコからどう見ても、生まれも育ちも立派な貴族の青年だった。でもその笑顔に油断しちゃダメ、油断しちゃダメとブツブツ繰り返すミランを、クリスは苦笑しながら眺めていた。

「閣下。今、王都に入りました」

御者台からかかった声で、クリスの顔が一気に騎士のそれへと変わる。心なしを取り巻く空気さえも、ぴんと張ったような気がした。

「分かった。このまま城へ」

気持ち低い声でクリスが御者に答える。たったそれだけのやり取り

だったが、ミランはここで改めて彼が本来自分とはめつたに口もきけないような騎士だということを認識した。

彼は王宮騎士団の中でも、特に王からの覚えめでたい側近中の側近だと御者が言っていたことを思い出す。そんな人が自分とふざけあつてたなんて、ちよつと信じられない。

多分、慣れない旅で不安がついていた自分にあわせてくれたのだろう。そう思つたら、また気兼ねなく話しかけることができなくて、なんとなく馬車の外へと視線を移す。石畳の上を走り出したようで、揺れ方が微妙に変わつていた。

「外、見ますか？多分貴方には寒いと思いますけど」

余程興味津々に見えたのか。クリスは微笑みながら、片手でカーテンを押し上げて、ちらつと外の様子を見せてくれる。特に申し出を断る理由もなかったため、こくと頷いた。

「・・・わあ！人がたくさん！」

「今日は市が立つ日なので、人もいつもより多いですね」

二人して顔だけ馬車の外に出すと、きよろきよろと周囲を見渡す。ここはレンガで出来た家が一般的のようだった。フスク村は木造の家ばかりだったから、ちよつと新鮮な気がする。馬車が走っている道は、市がたつている道から一本離れているが、それでも賑やかな空気は十分伝わってきた。

リベル半島の村は穏やかだったから、こんなに活気がある所はあまり見たことがない。

果物を売る店主の威勢のいい声、見知った顔と会つて道端で談笑する夫人、銀食器を値切り交渉する男性、あちこちの店を覗き込む子供たち。

なんだかウール祭を思い出してわくわくした。

「降りて、見て回りますしうか」

くすつと横から笑い声が聞こえた。

「・・・え?!いいんですか？」

「少しくらい大丈夫でしょう。すまないが、少し止めてくれるか」

クリスが少し大きめの声で御者に向かって言うと、しばらくして馬車がゆっくりと道の脇に止まった。まずクリスが馬車から降りて、その後を続いてミランが降りた。

「では、行きましようか」

「あ、はい・・・」

笑顔で促され、足を一步踏み出した瞬間。

「ア・・・ツツ、つうつ・・・！！！」

ビリッと電気が流れたかのような衝撃を感じた。

思わず胸を押さえて前に屈む。何故かまだ、ドクンドクンと何かの脈動を感じる。

「ミラン殿！どうなさったんですか？！」

焦った表情でクリスが覗き込んできたが、ミランの頭の中からは既に彼の存在は抜けていた。ただ熱く脈打つ何かに意識が集中する。

これは、一体何だ。

胸を掻き毟ると、指先に硬い感触がした。それは、ネックレスにした水の印章だった。

胸元から印章を引っ張り出すと、ドクンと強く脈打つ。

熱を持った印章は輝きを増し、何かを語りかけるかのように規則正しく脈打ち続ける。

「・・・呼んでる・・・？」

何かが、誰かが。自分を、水の印章を、呼んでいる？
いや、というよりも。

「・・・引き合ってる・・・？」

それはさながら磁石のように。わかたれた物が、元はひとつだった同じ物に戻りたいとでもいうように。

ふらりとミランは一步を踏み出す。一度歩く意志を持ってしまえば、あとは勝手に身体が動いた。引かれるままに、すべてを忘れ走り出した。

「ミラン殿？！何処へ」

クリスが慌てて声を掛けるが、聞こえていないようだ。それどころ

かあり得ない速さで、どんどん遠ざかって行く。後を追いかけて走り出せば、途端に原因不明の霧が行く手を阻んだ。

「……くっ……精霊か?!」

ミランの後姿はこれでもう完全に見えなくなった。それでも霧は晴れる気配がない。

精霊が関わっている現象であれば、下手にその術中に飛び込むのは得策ではない。それが分かっていたから、霧が晴れるまでなす術もなくその場に立っているしかなかった。

*

*

どこだろう。今僕はどこへ向かって走っているんだろう。

見たこともない街の中、息を切らしながら必死で呼ばれる方へ走り続けた。

何故だか取り巻く精霊たちが急いでと言っているようだったから、言われるまま示されるまま進み続ける。人気のない複雑な路地を先導してくれるのは、火の精霊だった。

もう帰り道も分からない程、何度も角を曲がった所で人の声がした。

「　　ッ　　卑怯　　・・がやることか!!」

印章がもう一度強く脈打つ。この声の主を探していたということだ。ミランは速度を緩め、慎重に声のする道に近づいていく。

「卑怯でも何でも、貴様に傷の一つでも負わせないと仲間がつかばれん」

「そんなこと考えてる時点で、てめえらみんな騎士として終わってんだよ。先に奇襲まがいにおれんとこのジジイに手出しとして、その後何もされるわけないと高をくくってたか？騎士様に楯突くヤツはいないだろうって？残念ながらおれたちは、そんな根性ひんまがったバカ共に素直に従うほど愚かじゃないんでね」

「そうやって思い上がるのもここまでだ」

「思い上がってんのは、どっちだって言ってるんだよ。奇襲でジジイを殺して、拳句合図ひとつで村を攻められるように包囲してたヤツらのどこに、従うだけの要素がある?!今だって子供を楯にとつてオレの動きを封じて満足か?何が騎士だ!偉そうに豪語するなら、それに見合うだけの行為を見せてみる!名ばかりの面汚しどもが!」

どうやら声の主が騎士に囲まれているようだったので、そうっと路地を覗こうとしていたミランは、子供と聞いて瞠目した。慌てて覗いてみれば、一種広場のような空間の中央に20歳程の一人の青年が憤慨した様子で立っており、それを取り囲むように騎士たちが剣を構えている。その中の一番手前、ミランの近くの騎士がその左脇に小さな子供を抱えていた。

助けなければ。きっとその為に精霊は呼んでいたんだ。

そう思うけれど、どうやったら子供にケガをさせずに助けられるのか分からなかった。

とその時、悩むミランの前に先程道案内をしてくれていた火の精霊たちが、踊るようにして騎士たちの周りを飛び、しきりに彼らの持つ剣を示していた。

「……あ、そうか……」

何を言いたいのかを理解したミランは、意識を剣に集中させた。

強気な発言をしつつ、青年はどうやって子供を遠ざけるかを考えていた。

すぐに片のつくケンカのはずが、偶々迷い込んだ子供を楯にとられて、決定的な打撃を与えることが出来ずにいた。卑怯な、とは思ったが、別にそれで攻撃手段を失ったわけではない。火を操ることの出来る自分なら、子供を巻き添えにせず騎士だけを燃やすことなど簡単に出来る。それでもためらっていたのは、外傷はなくとも心の

傷を子供に残してしまうことを考慮していたからに他ならない。

人体が燃えているのを見て、子供が一体どう思うだろうか。小さい子供だから、相当なショックを受けてしまうはずだ。トラウマとなつて、生涯火を怖がることになつてしまいかねない。人間が生きていく上で火を使わざるをえない以上、極度の恐怖心は持つべきではない。

だからずっと、子供にショックを与えないでなおかつ無事に逃がす方法を考えていたのだ。

それでも案が出てこなくて内心毒づいていると、火の精霊たちがしきりに騎士の周りを飛んでいるのが見えた。

何をしたいのかと思つていると、路地の入口あたりに壁に隠れながら青い髪の少年がいるのが目に入った。

バカが、こんな所に来るんじゃないやねえと言いかけて、少年の目が火の精霊の動きをしつかり追つていることに気付く。よく見れば、少年の周囲を守るように水の精霊たちが集まつているのが分かる。途端に懐にピリツと衝撃が走つた。声を出しかけて慌てて飲み込む。

何なんだと思つていると、火の精霊の声が聞こえた。

「……マジかよ。どうやってやる気だ……」

思わず渋い顔で呟いた瞬間、ザアツという音と共に騎士たちの上から滝のような大量の水が降り注いだ。水圧で全員の剣が地に落ちる。中には剣だけでなく、自分自身も水圧に負けて膝を地につけた者もいた。青年はその瞬間を見逃さず、飛び出して子供を抱き上げる。

そしてその勢いそのままミランの所まで走り、驚いたミランの手を掴んで路地を駆け出す。

「……わっ！あ、あの……」

「黙つて走れ。追いかけて来てる」

ちらつと後ろを見ると、確かに復活の早い騎士は猛然とこちらを追いかけてきていた。

「しつこい……いっそ燃やすか……ん？」

間近で子供が人体発火を見る危険性は無くなつた今、しつこいやツ

らを燃やしても構わないかもしれないと思いながら走っていると、火の精霊と水の精霊が前に飛び出してきた。

相対する属性の精霊が一緒にいることは珍しい。

何か問題でもあるのかと、つい立ち止まってしまふ。

「どうかしたのか？」

「わっ！来た！」

問いかける声と危険を告げる声が同時に発せられる。

振り向けば存外近くまで騎士たちが迫っていた。やはりお荷物二人を抱えての逃走は、いかに青年の運動能力が高かろうと無理があったようだ。

「ちっ、こうなったら」

舌打ちして、奴らを丸焦げにしてやろうと睨みをきかした時。

『熱を、下げて』

『水の柱を』

二種族の精霊が、それぞれの守護する者に短く囁く。

それが一体何を意味するのか、ミランも青年もさっぱり分からなかったが、ただ反射的に言われた通りに力を使った。すると騎士たちの目の前に突如として、分厚い氷の壁が立ちはだかった。勢いを殺せなかった騎士たちはそのまま氷の柱にぶつかり、その後が続いていた者は何が起こったのか分からず、わめいている声が聞こえる。力を使った本人たちもまさかこんなことが起きるとは思っていなかったのか、しばらく呆然と氷柱を見上げていた。先に我に返ったのは青年の方で、今の内にと、再び二人を引っ張り大通りへと足を進めた。

*

*

赤と黒を基調にした巨大な一室に、王宮騎士団の証たる黒い甲冑を身に着けた騎士たちが一定の間隔をあけて並んでいた。部屋の中央を横切るようにまっすぐ敷かれた赤い絨毯を挟んで並ぶその様は、

その道を通る人を出迎えるというより、逃げ道を塞いでいるようにしか見えない。その絨毯の続く先には、十段ばかりからなる階段があり、その上に金と赤で拵えた豪華な玉座があった。

「……ようやくの登城だな」

玉座に深く腰掛けながら脚を組んだ人物は、右手で頬杖をつきながら左手に握った蒼い寶石を弄んでいる。陽に透かすように石を持ち上げると、くつと喉の奥で笑う。

「伝説の水の賢者か……。今度こそ、これを完成させてもらわねば」

青に劣るくすんだ蒼色は、これが劣化品であることを示している。望んでいるのはこの蒼ではなく、目も覚めるような深く澄んだ水面のような色。

もうすぐ手に入るだろうその色を想像し、冷たい闇色の瞳に歓喜の色が浮かぶ。

「……ですが、彼が本当にその力を有しているのか分かりませんよ」

控えめだがしつかりとした声が、玉座の右後ろから唐突に響いた。見るものを凍らせるような鋭い視線が、声の方向にちらと送られる。そこには今までまったく気配を感じさせなかった黒いフードで全身を覆った人物が、視線に圧倒されることもなく悠然と佇んでいた。

「仮に貴方の言う物がその石だったとして、存在していること自体が奇跡です。ましてそれを完全にするなんて」

「確かに。今まで石を完成させられなかったヤツばかりだったと聞いている。今回だってそうかもしれないと、そうお前は思っただろう？」

「それもあります。私が言いたいのには、陛下の求める物が本当にその石の完成品で間違いないのかということですよ」

「……どういうことだ？」

フードの人物の言葉の内容に惹かれ、今度は視線だけでなく上半身を捻って見上げる。

「この世の理の全てを超越する伝説の代物。それが目に見えるような石の形をとり得るのか、ということですよ」

言いながらフードの人物はゆっくりと歩み寄り、玉座の右横に静かに立ち止まる。

「……フン。見えようが見えまいが、力が手に入れば問題ではない」

「………仰る通りで」

黒いフードで顔は見えなかったが、かすかに笑った気配がした。

「歴代の王たちが手に入れることの叶わなかったものを、私は手に入れてみせる。すべての札は揃っているのだから………」

両手を組んで再び深く腰掛けた王は、自信たつぷりに笑って視線を正面の入口に向けた。

絨毯の上を一人の兵士が駆けてきている。

階段下に辿り着くと兵士は片膝をついて低頭し、そのままの状態で声をあげた。

「只今ソラス卿より連絡が入りました。無事王都に到着したそうです」

王はにやりと満足そうに笑うと、兵士を下がらせた。

どうやらもうすぐ念願の対面を果たせそうだ。

その時ふと、隣に立っている人物が妙に押し黙っているのに気付いた。

「………ソラス卿……？」

フードで声がかくぐもって聞こえにくいのが、呟いた声は少し動揺しているようだった。

「ああ、お前は知らんか。幼少時代からの私の忠実な片腕だ」

「……ソラス……まさか、しかしそんな名は……古代ネヴェズ語はもう一部しか……」

王の言葉が聞こえているのかいないのか、フードの人物は右手を顎にそえて考え込むようにぶつぶつと呟いている。

「王よ、その騎士の名はもしか……クラウ・ソラスと……？」

「そうだ」

「……ツ……『不敗の剣』か……」

フードの奥で息を飲む音が聞こえた。何かに気付いたらしいその人物を、王は面白そうに見上げる。

「気付いたか？はは、さすが叡智の一族」

「貴方は知っていたのですか？」

「その時は何も。だが、偶然とは思えんだろう？完全な四賢者が揃うこの時に、『剣』も又時を同じくして現れたわけだ……何一つとして欠ける事無く、私の元にな」

運命だとは思わんか？そう言っただけに楽しそうに玉座の主は笑った。

運命なんて一番信じてなさそうな不敵な王が、笑って言ってしまえるほどあり得ない偶然だった。

「……運命ですか……」

フードの人物は皮肉げに呟いた。

決められた運命があるというなら、今ここに自分がいるのもその運命に導かれたからか。

ふと、もう二度と振り返るまいと決めた過去が脳裏をよぎる。

そしてすぐに、打ち消すようにかすかに首を横に振った。

「ならばもう、その齒車は廻り始めた。我々が生まれ落ちたその瞬間から」

世界が新たな世を望んでいる。そこから逃げる術など無いのだ。

否、逃げる気など初めから無かった。

第五章：登城

「ガルクさんて、『火の民』の族長さんなんです。実は僕も祖父から族長位を継いだんです」

「……」

ガタガタと上下左右に微妙な揺れを発しながら、馬車はひたすら王都中心部の王城に向かって進んでいる。寄り掛かった壁の振動を背中で感じながら、赤い髪の青年は向かいに座って嬉しそうにしている。青い髪の少年をちらりと見た。この状況で一体何が楽しいのか、理解出来ない青年はわずかに眉根を寄せる。

騎士たちから逃れ、子供も無事親元へ帰すことが出来た後、この少年に捕まってしまったのがやはりよろしくなかった。礼を言っただけに去るつもりだったのに、咳き込んで印章の話を持ち出してくるから、つい立ち止まってしまったのだ。

「あの、あ、あなたも王様に呼ばれた四賢者の一人なんですか？」

「！」

何だそれは、と思った。確かに王命により即刻登城せよと脅迫まがいで王宮騎士たちが村に押し寄せて来ていたが、そこに賢者の一族だからという遠慮も何もあったものではなかった。だが目の前の少年を見る限りでは、そのようなことがあったとは感じ取れなかった。ガルクは少年から視線をずらして、その後ろに控えている騎士を凝視した。揺れる馬車の中でも平然と姿勢を保っている金髪の騎士。

一見すると、二人の賢者に敬意を払って下がっているという様子だが、その右手はいつでも剣を握れるような絶妙の位置で留まっている。重心も完全に落としてはいないのだろう。一瞬でこちらの懐に飛び込んでくるぐらい造作も無く出来るに違いない。何より、関心のないふりをしながら騎士の意識が常に自分に向けられているのを感じ取れる。

「……どうしたんですか？ガルクさん？」

不思議そうに尋ねてくるミランの声がやけに場違いに感じた。

「………何でもない」

このぼけっとした少年は何も感じていないらしい。それも当たり前と言えば当たり前だった。敵意を向けられているのは明らかにガルクだけだったのだから。

それに元々火の民は『鬪いの民』とも呼ばれる戦闘能力に長けた一族だ。殺気や闘気、わずかな気配の動きすら敏感に感じ取れる。

「さんは付けなくていい。うっとうしい」

「え、でも……ガルクさん20歳くらいじゃないですか？年上の人を呼び捨てとか……」

「うっとうしいって言ってるだろ」

吐き捨てるように言えば、困惑した視線が彼方此方を彷徨う。その時後ろの騎士の威圧感がわずかに増した気がした。

「本人が呼び捨てでいいと仰ってるんですから、構わないでしょう」

「クリスさんまで……」

何なら私も呼び捨てしてくれて構いませんよ、と微笑んで言うクリスにミランはカ一杯首を振って遠慮した。残念ですと言って視線をミランからはずした後、一瞬だけクリスとガルクの視線がぶつかった。あまりに鋭く直接的な敵意を表した視線に、ガルクは思わず目を見開いた。こうまで明確な敵意が返ってくるとはさすがに予想していなかった。

こいつにとって大事なのは水の賢者だけってことか。

そう自分で考えて、ふと水の賢者だけに重きをおく理由があるのをおい出した。

同時に湧く、騎士と王への不信感。

「王城に着いたようです」

クリスの言葉と同時に馬車の揺れが止まる。小窓から外を見れば、歴史を感じさせる重厚な雰囲気、石造りの城が天を衝くように建っていた。

「では降りましょう。足場が少々悪いので私が先に降ります。ミラ

ン殿はその後に」

足場が悪いという割りにふらつくこともなく軽快に地面に立つと、クリスは当然のようにミランに手を差し出して丁重に小さな身体を降ろす。その間もクリスの威圧感ハガルクに向けられていた。ただガルクもそれに一々反応する気もなかったので、素知らぬ顔でさつさと馬車を降りた。

「さ……寒い……」

小動物のような少年は、寒さにガタガタと身体を震わせている。言う程寒くないだろ、と心の中で思いながら、むしろガルクは緊張感漂う異様な空気に顔をしかめた。

これが国の中心である王城の纏う空気だろうか。何が悪いわけでもない、目に見えておかしい所があるわけでもない。けれど第六感ともいうべき何か、ここはイヤだと告げていた。それに併せて先程の水の賢者への執着の理由が、己が推測したものと相違ないなら。

「……ちつ……嫌な予感がするな……」

ぼそつと呟いた言葉はその場の他の誰にも聞き取られることはなかった。

クリスに促され石段を登り続けていると、その後姿にガルクはふと違和感を感じた。重々しい空気の暗い王城にあつて、クリスのそのブロンドの髪と纏った純白の軍服が全然馴染んでいない。容姿のせいでだけなのか、ともかく明らかにここでは異質なものでしかない。

「……何だ……?」

嫌な予感がより一層強まった。

とりあえずクリスの敵意をひしひしと感じながらも、ガルクはわざとミランの横に近付いて並ぶ。ミランが一瞬不思議そうに見上げてきたが、すぐに嬉しそうな顔になって並んで足を進める。並んで歩くことに意味があつたわけではないが、何故かそうしなければならぬ気がした。離れてはならない、見失ってはならない、この子供を。

複雑な城の中をぐるぐる歩き続けて、来た道などとうに分からなく

なつてしまつた頃、ようやく一つの部屋の前でクリスが立ち止まつた。扉の前にいる二人の兵士が、クリスの姿を見ただけで何の確認をすることもなく扉の前で交差させていた互いの槍を解いた。

「お疲れ様です、ソラス卿！」

扉を開きながら兵士の言つた言葉に、ガルクは一瞬我が耳を疑つた。そして理解した瞬間に、その顔からざつと血の気がひいた。

「・・・おいつ！おまえ・・・ミラン！こいつの名前はクリスなんじやなかつたか?!」

慌てた様子で耳打ちされ、ミランは一瞬ぼけつとする。

「え、そう呼んでほしいと言われたから・・・。確か本名はクラウ・ソラスだつて」

「くそつ・・・やられた・・・輝ける白の騎士か・・・信じちゃいなかったが、本物の『不敗の剣』だつてことか・・・」

「『不敗の剣』・・・?」
たどたどしく紡がれる言葉に、一瞬ガルクが目丸くする。

「分からない・・・ああ、いや、そうか。そういう約束だつたか・・・」

面倒くさいことを、とガルクが額を手で覆い苦々しくつぶやく。ますますよく分からなくて、ミランはおどおどしながら切羽詰つた表情のガルクを見上げた。

だが彼は彼で何かを考え込んでいるのか、その様子に気付かない。

「クラウ・ソラス卿、及び水の賢者ミラン・スウォール殿、火の賢者ガルク・ヴィシユア殿の謁見にございます」

開いた扉の先に、兵士が高らかに声をあげる。

兵士の声が響き渡るその部屋は、赤と黒が互いに主張しあう実に禍々しい空間だつた。

クリスが二人の先を行き、赤い絨毯の上を惑いなくゆつくりと進んでいく。異様な空間に圧倒されながらも、ミランは決心して足を踏み出した。その隣をガルクが表情を変えずに歩く。言葉を一言も交わすことなく、やがて階段の手前でクリスが止まつた。

「クラウド・ソラス、只今任を終え戻って参りました」

第六章：リア・ファイル

クリスが階段上の玉座の人物に頭を垂れる。

「よく戻った、クリス。待ちかねたぞ」

間を置くことなく、存外気安い声が頭上からかけられた。その声の若さにミランは思わずぶしつけに玉座を見上げた。王というからにはもっと年配の人物を想像していたのだが、実際その目で見る王はクリスとさほど年が変わらないように見えた。20代後半くらいだろうか、ただ纏う雰囲気は見た目の倍以上生きているかのような妙な威圧感をそなえていた。

「それが、水の賢者か」

「はい。印章に認められた正統な賢者です」

品定めをするような目でじろじろと見られ、ミランは居心地が悪くなって目を伏せる。

「まずは、歓迎しよう。正統なる賢者たち。我が名は、フラガラツハ・ブリューナク。知っているとは思うが、長く絶えなかった王家の跡目争いも私が玉座を継いだことでようやく終わった」

「何番目だ？」

「ん？」

揶揄を含んだ声が頭上から響く。

「あんたは何番目の王子だった？」

王を前にして頭を垂れるどころか、腕を組んで真正面から睨みつけているガルクの態度に焦ったのは周囲の騎士たちだった。

「貴様、賢者とは言え王にその態度は」

「良い。威勢がいいな、火の賢者。私は前王の13番目の末の王子だった」

「末か・・・なら、他は全員殺したか」

ガルクも王も互いにぴくりとも動かずに淡々と会話を続ける。

「仕方ない。玉座とは血によって贖われるものだ。一刻も早く国を

平定する為にも、甘いことなど言っではいらなかった。まあ、そのあたりにおまえたち賢者を呼び出した理由があるのだが」

その前に、と言って王は横に控えていた黒いフードの人物に何かを手渡す。そしてそのフードの人物はゆっくりと階段を下りて、ミランの前で立ち止まった。

「え？」

呆然と見上げると手を指差された。手を出せと言うことだろうか。

何が何だか分からないまま両手を差し出すと、その掌の上に握りこぶし大の蒼い石がそつとおかれた。

「??？」

「それが何か分かるか、水の賢者？」

先程よりも真剣みを帯びた声が玉座からふってくる。ミランは一瞬だけ視線をあげるが、すぐに手の上の石に視線を戻した。蒼くくすんだ色の石。水の印章とも違う、不思議な感じの石だった。ちらと横を見ると、ガルクも不思議そうな顔で手の中の石を覗き込んでいる。この様子だと、彼もこの石については知らないのだろう。

「王家に代々伝えられてきたものだ。幾度かの戦乱でそれについての記述の載っていた書物は焼かれてしまった。故に私はその石についてよく知らぬ。賢者が・・・作ったということ以外は」

王家に伝わる賢者の作った石。確かそれは、この世でたったひとつの王の証。

「・・・あれ？」

唐突に浮かんだ言葉にミランは小首を傾げた。

何故これが王の証だと分かる？見たことも聞いたこともない、今の今迄存在すら知らなかったこの石の意味が、何故自分に分かるのか分からない・・・何もかもが自分の知らぬところで動いているような感覚。

だが理屈ではなく訴えてくるものがあつた。

この石は、民の戴く王を示す石。王の手にあつて虹色に輝く、それは。。。

「……リア・ファイル……？」

見えぬ力に促されるように洩らした言葉に、目の前のフードの人物とガルクが激しく反応した。フードの人物は一瞬身を硬くし、素早くミランの手の上の石を取り上げ、ガルクは息を呑んで表情を硬くした。

「リア・ファイルって……玉座の象徴『真実の石』じゃねーか」

「……し、真実の石？」

「王の手にあつて輝きを失わず、其は真実を告げる石」

リア・ファイルが何を示すものか、伝承に伝わる一文を諳んじようとしたガルクの声をフードの人物の鋭い小さな声が遮った。一言も発しなかった人物の焦った声に、二人は驚いて言葉を失う。

「静かになさい。石の意味をここで語る必要はない、火の賢者」

突然の一喝をした割に穏やかな声が呟きほどの大きさでフードの下から洩れる。そして言うだけ言うと、石を手に踵を返し階段を登っていく。

「……ど、どうしたんだろう……僕何か悪いことを言ったのかな……？」

大きな声で話してはいけない気がして、耳打ちするように小さな声でガルクに問いかけた。

「さあ、どうなんだか。だがこの場で声を大にして言うのは、良くねーだろうよ。あれは王を選別する石だからな」

「選別？」

「オレ達の持つている印章と一緒に。相応しい者が持てば光り輝く。さつき言いかけただろ？あの全文は『王の手にあつて輝きを失わず、其は真実を告げる石。玉座に上りし王の許、七色に輝く其の光、遍く全てを照らす導きの灯とならん』となる。つまり王となる者が石を持って虹色に輝く。それこそが王の証となるのさ」

「虹色に……。でも、今の石は」

玉座の隣に辿り着いたフードの人物が、王に何かを耳打ちしている。その人物の掌にある蒼い石を眺めながら、ミランはガルクの服の裾を無意識で握った。

「輝いてなかった。そう、つまりアレは王に相応しくないとことだ」

ガルクはしてやったりという風に笑っていたが、その表情はどことなく苦々しいものだった。束の間微妙な沈黙が訪れたが、それはすぐに段上から降る声により破られた。

「・・・どうやらこの石は私が望んでいるものとは違ったようだ。・・・だが、この石が何か分かったということが、お前が間違いく正統な水の賢者であることの証・・・」

声は変わらず淡々としていた。いや、それどころか愉悦めいた色が含まれている。

本来あるべき反応と違った反応に、背筋が凍った。

「では作り出せるか・・・お前なら、『ウシユク・バーハー』をもったいぶるようにたっぷりと余韻を残して響いた言葉。

ミランが何のことかと尋ねる前に、素早くその目の前にガルクが立ち塞がった。いや、ミランの邪魔をしようとしたわけではなく、守るように。玉座の主から守るようにその背で庇う。

第七章：課せられた選択

「ガ・・・」

「黙れ」

己より遙かに大きな背中に視界を塞がれて、ミランは戸惑う。

「・・・つく・・・くく・・・は、ははははは」

狂ったかと思えるような笑い声が響いて、ミランは本能的な恐ろしさで身を縮める。

「そうか・・・お前は知っているか、火の賢者。ならば私の求めるものも分かるな？」

「知りたくもなかったが」

「そしてお前がそれを隠すということは、それが私の望むものを作り出せる可能性を秘めているということだな？」

「知らん」

「・・・・・・ふっ・・・」

取り付く島もないほどにべもない返答を返すガルクを余裕の表情で見返すと、王は軽く右手をあげる。その瞬間に部屋の中央に跨る絨毯の両脇に控えた兵たちが、槍を一斉に前に突き出す。

「ひゃっ・・・!?」

驚いたミランはガルクの背中にへばり付き、ガルクは更にミランを庇うように右手でその身体を支える。ちらりと視線だけ後ろの入口に向ければ、後方も既に兵によって囲まれている。

「・・・何のつもりだ」

「察しの良い火の賢者なら分かると思うが・・・・・・私にはどうしても、その水の賢者が必要なのだ。他の誰よりも、な。クリス!!!」

ガルクの鋭い視線から目を逸らさずに、階段の下に控えているクリスに声をかける。兵に囲まれる二人の数歩前にいるクリスはかすかに躊躇う素振りを見せたものの、振り向いてその静謐の青い瞳をひ

たとミランに定めた。

「……長き王家内乱により、隙をつかれ他国からの侵略が相次いで最早一刻の猶予も許されない状況です。かつての王と四賢者で交わされた契約を覚えておいででしょうか？今こそその約束を果たす時、どうぞお二方、我らの王の為にそのお力をお振るい下さい」

「……つまり手駒となって戦争しろってことだな」

「端的に申しますと」

「……だがそれと、ミランを欲しがるのは別だろうか？」

「……言葉が足りなかったようです。ミラン殿以外の三賢者の方には、戦の為にお力を貸して頂きます」

「……断ると言ったら？」

クリスの片眉が一瞬だけあがる。

「貴方に縁ある者すべてが死ぬことになります」

「その様子じゃ村に第二部隊を送ったか……」

「「明察」

ガルクは既に大方の予想はついていたので取り乱しもしなかったが、この会話を聞いて誰よりも驚いたのがミランだった。ガルクの背中にすっぽり隠れていたのを、慌てて顔だけ出す。

「……ちよ、ちよと待つて下さい！それってどうい
う……」

目の前の金髪の騎士を必死で見つめる。少しだけ彼の青い瞳が揺れた気がした。

「……残念ながら、貴方も例外ではないのです。ミラン殿。既にフスク村は我が国の騎士団によって包囲されています。あなた方が拒否をなされば、その時点で村は滅ぶでしょう」

「……つ……な……な……んで……そんな、こ
と」

「どうあってもその力が欲しいからに決まってるだろ」

不快感を顕わにしてガルクが呟く。ミランを押さえる手の力が少し強まった気がした。

「村人は人質だ、イエスと言わせる為の。だけどすんなり従うんじやねーぞ、ミラン」

「・・・ガル・・・」

背後に隠している子供の気配が酷く頼りなげに揺れている。突きつけられた現実には戸惑っているのだろう。

「あなたが王に協力すると仰って下されば、危害を加える気はありません。ですからどうか・・・お願いします、ミラン殿」

そう訴えかけてくるクリスの瞳が揺れている。わずかだが、苦しそうだと思うのは自分の勝手な思い込みだろうか。こんな手段を使う人じゃないと、短い期間しか一緒に旅をしなかったけど、信じていたかったからだろうか。

「・・・最終的にどういう判断を下すかはお前次第だけど、先に言っとく。例えここでお前が協力すると言ったところで、村人たちの命の保証はねーんだぞ」

怒気を含んだ低い声が随分近くで聞こえた。気付けばガルクがミランの方を向いて、声が聞こえやすいようにわずかに膝を屈めている。「ヤツが欲しがっているのはお前の能力だけだ。もし、お前が能力を自由に操れないと知れば、力を発揮させる為にお前の大切な人たちを殺すこともするだろう。逃げ場を失くす為に、お前の知らない内にさっさと村を滅ぼしているかもしれない。そうでなくても、戦をする気なんだ、その最前線に村人全員送るかもしれない・・・考えられる事態はいくらでもあるけどな、どのみちハッキリしてんのは、イエスだろうがノーだろうがお前の命だけは助かるってことだ」

「・・・」

「裏を返せばお前以外は死ぬ確率の方が高いし、お前だって命は助かってても精神的にどんな負担を架せられるかは分からんぞ」

ガルクの言葉は真実だと思えた。少なくとも、信じたくても信じきれないクリスの言葉よりは。

視線が無意識に下がる。何か掴むものがほしくて、ガルクの服を今迄以上に強く握った。
選ばなければ。決めなければ。
どちらを信じるかを。

第八章：選ぶ道

「……水の賢者はまだ戸惑っているようだな。では、先に火の賢者から答えを聞こうか」

過酷な選択を課しているというのに、まったく変化のない声がやけに頭に響く。

何とも思っていないのだ、人の命をその手に握るということを。それが王というものなのかもしれない、そう在らなければ王ではいられないのかもしれない。

考えれば考えるほど混乱する頭を抱え、ミランはただ俯くことしか出来なかった。

「私に協力するか？」

「否」

実にあっさりと言ったとガルクの返事は一言だった。

「死にたいのか？」

「イエスと言ったところで、全員戦場送りで遅かれ早かれこの世とおさらばなのは目に見えてる。だったら、オレたちは自らの誇りを賭けて戦って死ぬ方がマシだ」

ガルクの手がミランの頭をぽんと叩いた。

聴けということなのだろうか。注意を促されてミランは目の前の青年を見つめる。

自分のようには震えていない、堂々とした背中。

「笑って死ねと言えるヤツにオレたちは頭を垂れる気はない。人の命を肩のように扱えるヤツが、人の上に立てるとは思えないからな」

「……ほう、言うな」

「一時でも命永らえる為に、アンタに頭を垂れること。自分たちが助かる為に、多くの力なき人々の命を奪わなければならないこと。」

そんなこと、オレの治める民は決して喜ばない」

迷いのない背中が、何よりも強く見える。

ふと、村を出る前に祖父に言われたことを思い出した。

『おまえと同じ精霊に愛されし者たち。彼らを信じることを恐れてはならん』

「罪なき人の血で汚れた手を、オレの民はきつと誇りはしない。オレはオレを長と認めた民の為にも、火の民としての意思と尊厳を汚すことは許されない」

『いつか儂ら水の民と何かを秤にかけねばならぬ時は、儂らを選んではならんよ。民を守る為に、その手を汚すことはおまえには出来ん』

祖父の声と目の前の青年の声が重なる。

震えぬ声。迷いも恐れもない、力強い声。

彼は知っているのだ、上に立つものとして。その手に守るべきものを持つものとして。どうあるべきかを。

何を信じるのかを。

「……では、火の民は反逆者ということになるな」

「……さてね。……だからと言って大人しくやられる気は毛頭ないが」

冷たく響く王の声に返すのは、挑戦的なまでに強気な言葉。

射るような鋭い紅い瞳に睨まれても、王は余裕の態度を崩さずゆったりと頬杖をついた。

「……ふむ……。どうやらその火の賢者は死ぬ気らしいが、見たところ水の賢者は火の賢者に懐いているようだからな……」

突然話の中に自分の名称が含まれて、ミランは知らずびくつと身を震わす。

「どうだ、水の賢者。このままではその火の賢者は死罪ということになるが、お前が私に力を貸すというなら、火の賢者だけは助けてやるぞ?」

にっと至極楽しそうに微笑みかけられ、ミランは全身を凍らせた。

ガルクもこの時になって初めて動揺で身を揺らす。縋るように見上げれば、ひどく真っ直ぐな紅い瞳とぶつかった。上半身だけを擦ってミランを見つめるガルクの目は、「余計なことはするな」とはっきり語っていた。

「……………っ……………」

どうしよう。どうしよう。

何か言わなければいけないのに、震えて声が出ない。

死にたくない、死なせたくない。だけど……………誰かを傷つける為に力を使うことはしたくない。

ミランはガルクの胸に両手を回し、ぎゅっと抱きついた。ガルクは驚いて瞠目するが、背中に縋りつく小さな身体が哀れなほどに震えているのを直に感じ、そつと溜息をついた。

今ここで頼れるものは、おそらく同じ賢者という立場の自分だけなのだろう。

まだ幼いと言ってもいいほど、何も知らず無垢な子供が命に関わる決断を迫られているのだ。恐怖し、混乱するのも当たり前。まして彼はおそらく真綿にくるむように大切に大切に育てられてきたに違いない。とてもこのような状況に対応できるはずもなかった。

けれど決めなければならぬ。酷だと分かっている。

「……………ミラン、決めろ。おまえにしか決められないんだ」

可哀想だとは思ったけれど、わざときつい声で促す。背中で小さく首が振られる動きが感じられた。

「決めろ！逃げ場はねえ」

「……………だ……………」

「ん？」

「……………死……………じゃ……………やだ……………」

ガルクの耳に届いたのがおかしいと思う程、消え入りそうな小さな泣き声。

けれど泣き声云々の前に、その言葉の意味に気付きガルクは一瞬動きを止めた。混乱して何を言っているのか本人でも分かっていない

のかもしれないが、だからこそその言葉は彼の本心を伝えていると思っただ。死なないでほしいということは、心ではもう王の命令に従わないと決めているのではないか。

「……おまえ、答えは出てるんじゃないか？」

「……っ・み、な……死ん……じゃ……」

やっぱり。ガルクは確信して、ひそかに心の中で笑った。

遠い昔の約束があるからガルクはミランに注意もしたし、出来得る範囲で守ろうとした。だけど信じていなかったのは確かだ。自分と同格の存在であるとは正直思っていなかった。

けれど今どうすべきか、何を選ぶべきかを無意識でこの子供は知っている。それは水の賢者だからこそ、何かを直感として感じ取っているのかもしれないが、それでもこの一言でガルクはミランを信頼するに足る相手と定めた。

ガルクは自分の胸の辺りでしっかりと握られている手を優しく叩いた。

「大丈夫だ。おまえはちゃんと分かってるだろ？どうすべきか」

「……っ・っ……」

「どの道を選んだって後悔はあるんだ。なら、お前が正しいと思う道を選べ。オレはおまえの答えを信じる」

重ねられた手の温かさと、かけられる声の穏やかさに、混乱していた心が凪いだ。

背中に押し付けていた顔をゆっくりと離す。まだ顔は俯いたままだ。

『儂らはおまえを信じておる』
信じると言ってくれた。

遠き故郷で別れを告げた大好きな祖父。

『皆おまえを愛しておるよ。だから迷わずに選びなさい、進むその道を』

きつとこうなることを知っていた。知っていて、それでも自分の意思に任せてくれた。

背中を押してくれた。

「ミラン」

そしてここには、自分を信じてくれるという同士がいる。

ガルクの胸に回していた腕をするりとほどく。前を遮っていたガルクは、拘束がなくなったことでミランの隣に移動した。

「……僕……は……」

何が正しいのかなんて分からない。決めるだけの権利を持っているのかも。

何故自分が、とも思う。

だけど重要なのは何故自分がなのではなくて、今ここで自分がしなければいけないという事実。

声を出す為にぎゅっと強く拳を握る。俯いていた顔を上げて、今度はしっかりと玉座の王を見上げた。

第九章：心の声

「……協力……できません……」

「?!」

「ミラン殿!?!」

震えているがしっかりと通る声に驚愕したのは、段上の王と取り巻く兵、そしてクリス。

王はそれまでの余裕を一瞬にして隠し、きつい目付きでまっすぐ見上げてくる青い瞳を睨む。はつきりと態度が硬化したのが分かったが、ミランは目を逸らそうとはしなかった。そういう反応が返ってくるにはある程度予想していたし、何より隣にいるガルクがよく言ったとばかりに笑っているのを視界の端でとどめ、わずかばかり勇気付けられたからだ。

「……それで、本当によろしいのですか?」

最早王は何も言おうとはしなかったが、拒否を示したミランに尚も食い下がるのは、明らかに取り乱した様子のクリスだった。

「クリスさん……?」

「悲しむのは貴方です。これは口先だけの脅しではありません……ですから……どうか今一度、お考え直しを」

悲痛とも言える苦しげな声だった。ミランは何故クリスがここまで必死になってくれるのか分からず、困ったようにただ見返すばかり。

「……どうした、クリス。おまえらしくないな」

「陛下!彼はまだ戸惑っているだけです、まだ決断なさる必要はないかと」

「……その態度が珍しいと言っているのだ。短い旅だったはずだが、そこまで入れ込む程に惹かれるものがあつたのか、水の賢者に?」

「……いえ……それは……」

問われてぐつと答えに詰まるクリスをちらと見て、王は面白くなさ

そつに鼻を鳴らした。

「よい。おまえにその理由が分からなくても、私は知っているからな。．．．やはり、『不敗の剣』だからか．．．」

最後の方は呟きだった。それを偶々耳で拾ったフードの人物はさあ？というふうに着を竦めた。一方ミランは自分の知らぬ何かを王たちが知っている様子なので、つい答えを求めるように隣の青年を見上げる。ガルクの表情には驚きと納得が混じっていて、クリスタルの会話から何かを察したのは間違いなかった。

「ミラン殿！」

悲痛な声のする方に首を廻らせば、切迫した様子のクリスタルの表情が見て取れた。

「．．．．．ごめんなさい．．．クリスタさん．．．でも僕．．．協力出来ません．．．。ただの脅しじゃないって．．．分かってるけど．．．、今ここで王様の命令を受け入れることが．．．正しいことだとは．．．思えない、んです」

躓きながらも己の意見を言おうとするミランを、その場の誰もが黙って見守った。

「僕だって、皆に死んでほしくない。でも、それと同じくらい、この力を戦争で使うなんてしたくない。．．．それに．．．．．。．．．それに、王様の言うウシユク・ベーパーが何かは．．．知らないけど、それを求めてはいけない．．．ということは分かる．．．。しちやいけないことだって、思う」

理性や道徳心なんて、そんな立派なものじゃない。

そんなことを判断できるほど、まだ自分は人生を生きていない。ただだからこそ、感じるものがある。心の奥から訴えてくるものがある。

「僕が．．．僕が本当に水の賢者だと言うなら、僕の手をすべきことは、守り、育むこと。み、水は全ての生命を生かすものだから。王様が命を奪う選択を是とする限り、僕の手とは反します」

「だから従わぬと？」

「……っ、何が良いのか悪いのかなんて判断出来ない！！けど、従うなと心のどこかが叫んでる！」

感極まってミランが叫んだ後には、一瞬の沈黙が流れた。そしてこの緊迫した空気の中に、ぶっと場違いな笑い声が響く。

「……くく、そーだな。その通りだ。いっぱしに人道精神なんて語りだしたら、殴ってやろうかと思っただぜ。おまえオレより年下のくせにつてな。十五年かそこらしか生きてねーのに、大人顔負けの舌戦繰り広げられたら年長者の立場ねーだろ」

ガルクは笑いながらミランの背を勢いよくばんつと叩いた。少し痛いと思つて責めるように視線を送れば、逆に悪戯小僧がとびつきりの悪戯を成功させたみたいな笑顔を向けられて拍子抜けする。ずつと怒つたような不機嫌な顔ばかりだったから、驚いた。

「ま、そーいうわけだ。直感的にアンタは好かないつてよ。諦めたほうがいいぜ」

ガルクはミランの肩に手を置き、玉座の主に笑いかけた。

その瞬間に不敵な王の表情が一瞬歪む。けれど瞬きの後には、先ほどまでの余裕の表情に戻っていた。

第十章：逃走

「……どうやら、おまえの訴えを聞いている暇はないようだぞ、クリス。丁重に迎えようと思ったが、仕方なかるう。水の賢者は無傷で捕える！火の賢者の方は殺して構わん」

号令と共に二人の周りは完全に騎士たちに囲まれる。

「そう簡単にいくかよ。誰を相手にしてると思ってるんだ！」
ガルクの紅い瞳が煌く。

ゴオツという激しい音が聞こえた時には、二人を囲む焔の渦が出来ていた。渦の中は外からは一切見えない。

「逃げるぞ。走れるな？」

「うん！」

「この部屋からオレ達が出たら、入口を凍らせるぞ」

城下で氷柱を作ったときの要領と同じだ。確認するように目配せするガルクに、同じく視線で答え、扉に走るべく方向転換をした。

「走れ！！」

声と同時に焔が消える。

扉の方にいた騎士たちは、次の瞬間に立ち昇った天井まで届く勢いの焔の壁に弾かれ、扉までの道は二枚の焔の壁によって確保される。ミランはその道を扉に向かって駆け出すが、追いかけてくるはずの気配を感じなくて顔だけ後ろを振り返る。

「ガルツ！！」

追いかけてこなかった彼は、騎士から奪ったと思われる剣を両手に握りクリスと剣を交えていた。

思わぬ光景に足を止め、来た道に戻ろうとすると。

「バカ！来るんじゃないよ！！」

気配を察して、ガルクが怒ったように叫ぶ。ミランを振り返ることはしなかった。

否、振り返っている暇などない。

上段から振り下ろされる剣を、力の方向を変えていなす。空いたクリスの右脇腹を目掛け剣を振れば、素早い返りで阻止される。休む暇なく打ち込めば、相手も同等の力で反撃してきた。

「先に行け！」

大声で叫ぶと、ミランが戻ってこないようにする為と他の騎士がミランを追えないようにする為に、ミランの目前にもう一枚焔の壁をつくった。

「ガルツ！！！」

叫び声は新たに出来た焔の壁に飲み込まれる。後ろを見れば、扉までの道は完全に焔の壁に囲まれた個室と化しており、誰もミランの後を追うことは出来そうもない。

水を操る自分ならばこの壁を越えることは出来るだろうが、そうした所で彼の足手まといになるのは目に見えている。彼的心思に応えるには、早くこの場から逃げればいいのだが。

「ガルツ！！！」

もう一度叫ぶ。こちらに何の音も聞こえないように、向うにもきくと聞こえていない。

これだけの焔を操るにはかなりの力を消耗するはずだ。けれどここには、精霊の数が少ない。殊に火の精霊は。

力を借りるにしても、普段の倍以上の負担がかかっているのは間違いないかった。

「……………少しだけ、みんな力を貸してね」

迷った末、いつも自分を守ってくれている水の精霊と、この部屋にいるごく少数の水の精霊に呼びかけた。

キインツと刃のぶつかり合う甲高い音が響き、交差された剣は進むことも退くことも出来ずせり合っていた。真正面からぶつかってくる、射殺さんばかりの鋭い青い視線に冷や汗をかく。

「なんつー殺気だよ。命令聞いてるだけってカンジじゃねーよなー

「？」
「わずかの隙もつくれない状況に苦しい顔をしつつも、悪態をつくことはやめない。」

「ま、最初っから敵意むき出しだったけど。そんなにあのチビが大事か？」

「王命だ。貴様を殺し、ミラン殿を連れ戻す」

「バカか、おまえ。命令だけでこんな真剣になる奴がいるかっての。気付いてねーのかよ？」

至近距離でクリスの片眉がぴくりとあがるのが見えた。

「何を言っている？」

「何も知らねーってか？」

挑発するように言えば、剣にかかる力が増した。拮抗していた剣が、徐々に押され始める。

ガルクはちつと舌打ちして、力を込めてその場に踏ん張る。

「いくらオレでも『不敗の剣』と剣での勝負は御免蒙りたかつたぜ」
ボソツと呟いた言葉が聞こえたのか、クリスが微かに力をゆるめた。
妙に思っで見れば、青い瞳が探るようにこちらを覗き込んでいる。

「『不敗の剣』？」

「……知らねーらしいな。だけど、素直に教えるほどオレはアンタに好意的じゃあない。昔っから、そうだけだな。オレたちの関係は」

「？」

そのまま黙って二、三秒睨み合っていたら、突然周囲を濃い霧が覆った。

「?!」

「霧っ?!?!」

驚いて視線だけ廻らせるが、目の前で剣を交えているクリス以外は一切何も見えない。

音さえも聞こえぬ深い霧。

それはどうやらクリスも同じのようで、困惑して辺りを見回してい

る。

その時ガルクの視界の端に水の精霊が見えた。

「なるほど。やってくれる」
にっとう嬉しそうにガルクは笑った。

この霧はミランがつくった迷いの霧だ。視界も聴覚も奪う。今は至近距離にいるから見えるクリスだが、少しでも離れればあつと言つ間に姿も見えなくなるだろう。

どこにいるかも誰がいるかも分からなくなる。

追っ手を撒いて逃げるには最も有効な手だ。

「アンタの相手はまた今度だ」

「待つ・・・」

剣を弾いたガルクが一步退く。クリスはそれを追おうとするが、瞬時に何も見えなくなつてしまった。呆然と前を見つめ、やがて剣を下ろしてゆつくり頭を振つた。

「・・・何だ、一体。『不敗の剣』・・・？」

愁いを帯びた咳きは、深い霧に吸い込まれて消えた。

第十一章：迷走

「見事にしてやられましたね」

落胆しているでもなく、淡々とした声がフードの下から洩れる。

極端に狭い視界の先にあるのは、分厚い氷で閉ざされたこの部屋唯一の出入り口。

先程から騎士たちが氷を破ろうと必死に剣を振り回しているが、その努力は結局徒労に終わっている。小気味良い音をたてて剣を弾かれている様は、いつそ愉快だ。

「刃向かってくるのは火の賢者だけだと思っていた」

「同感です」

あれだけ生意気な青年の隣にいれば、女と見紛うばかりの美少年がこれだけ大胆な行動に出るとは誰も思わないだろう。

「貴方相手に啖呵きましたしねえ」

相当怖かったでしょうに、と笑いながらゆったりと感想を述べる。

そんなマイペースな相手にちらつと視線を送って、王はふんつと鼻を鳴らした。

「みすみす見逃したな？」

「何のことですか」

「白々しいな。おまえには霧の中でも見えていたはずだ」

「精霊だけなら。賢者二人は見えませんでしたよ、流石に」

肩をすくめて苦笑を洩らす。

まさかここから全速力で追い掛けるなんて離れ業出来ませんし、とどこまでも人をくつたようなのんびりとした返答に、王は眉根を寄せた。

「水の精霊が見えましたよ。一人動いていたのが。多分あれが火の賢者を誘導していたんでしょう」

絶対的に精霊の数が少ないこの部屋では、少しの動きでも目に付く。逆を言えば、これだけ従う要素の少ない場所であれだけの焰を操っ

た火の賢者と、部屋中に特殊な霧を維持し続けた水の賢者は、非凡な才能の持ち主ということになる。

いや、彼らの場合は才能というより、存在そのものが精霊たちに愛されていることが大きく影響しているのだろうが。

「予想以上ですねー・・・彼らの能力。敵に回すと痛いですよ？」
「既に回した。だが、まあ、重要な駒はまだ我が手の内にあるからな」

心配はしていないということだろう。

目の前から二人の賢者が逃げ出したにも関わらず、確かにこの不敵な男は少しも焦ってはいないようだった。

フードの人物は、王から視線を離して、階段下で佇んでいるクリスを見つめた。

心ここにあらずといった様子が見て取れて、彼はフードの下で溜息をつく。

王の強気の原因は、自分と、そして『不敗の剣』が傍にいることにある。

特に『不敗の剣』の忠誠を手に入れた、ということに。

「・・・・・・・・」

フードの人物はふと顔を上げて、再び扉を見つめた。

扉そのものではなく、その扉の向うに逃げていった彼らの影を求めて。

*

*

「チツ、簡単には出られないとは思ったが、さすがにしつこいな」
何度撒いたと思っても、廊下の角を曲がる度に増えていく追跡者の数に、さすがのガルクもひたすら逃げることしか出来ない。

「・・・・・・・・ガ・・・・・・・・ガル・・・・・・・・僕たち、上に追い込まれてない？」

「・・・ああ」

ガルクに比べたら体力のないミランは、既に息をきらして、ガルクを追いかけるだけで精一杯の状態だ。

それでも、階段を下るよりも上る回数の方が多いいのは気付いていた。

「元々城つてのは、簡単に踏み込まれないようにするために、複雑な造りになってんだ。そこを初めて来たオレたちが、追いかけれながら正しい道を選ぶはずがねえよな」

時折追手の兵たちを火で威嚇しながら、なるべく距離を縮められないようにはしている。

謁見の間から逃げ出したものの、自分たち二人が逃げ出すことも計画に織り込まれていたのか、扉の周囲は既に兵で固められていた。

元来た道に戻るつもりだったが、それを読んでいたのか、全く逆方向へ追い立てられる形で逃げるしかなかった。二人の力を使えば強行突破も出来たのだが、力の使いにくいこの場所で、既に盛大に力を使った後だったため疲労が常より激しかったことと、予想より多い兵の数に咄嗟に逃げることしか思いつかなかった。

とはいえ、追い込まれてぐるぐる上に上っているのは、状況は悪化するばかりだ。

何か方法はないかとガルクが視線を巡らせていると、風のうねりが顔の真横を駆け抜けた。

瞠目して風の去った方を見ると、階段の踊場の外に背の高い木が見えた。

さわさわと風に揺れる葉が、何かを語りかけているかのように感じた。

「！」

「ガル？」

ぴたりと足を止めたガルクに倣い、ミランもゆるゆると足を止めた。

苦しげに息をつきながら、ミランは訝しげにガルクを見上げる。

何かを思いついたかのように真剣な目で外を見つめるガルクの視線の先を、ミランも目で追った。

「……いちかバチか……」

確証はないが、とぼそつとガルクが呟く。

と同時にミランは脇腹をつかまれ、ガルクの片腕に抱えられた。

「……え？」

荷物を持たれるように抱えられたミランは、唐突に変わった視界に驚き、声を洩らした。

「……え……ガル……何……？」

「黙ってる。舌噛むぞ」

不穏な気配を感じたミランが問いかけると、ガルクはにべもなく言い放ち、階段に向かって走り出した。

踊場に向かって全く速度を緩めようとしないガルクに、ミランも彼が何をするつもりなのか気付いた。

「と……」

跳ぶ気?!という言葉は喉の奥で凍りついた。

宙に浮いた気がした次の瞬間、壁を飛び越えた二人の身体は重力に沿って真つ逆さまに落ちていった。

第十二章：戻れぬ道

「！！！！」

「う、わっ！！」

スローモーションのように感じられたことも、実際にはほんの数秒にも満たなかった。

両足から着地することが出来たが、二人分の落下の衝撃を一人で受け止めたガルクは、呼吸が一瞬止まった。そしてせりあがる空気の流れに逆らえず、ゲホゲホと咳き込む。

「ゲツホ、ゴホ………なんとか無事か……」

小脇に抱えていたミランを放すと、多少目を回したらしいミランがふらりとよろける。

「あ………だいじよぶ……」

差し出されたガルクの手を掴み、ミランはふるふると頭を振った。

「ガルは、平気？」

感覚が戻ってきたミランは、既に平気そうな顔をしているガルクに問いかけた。

「ああ。こいつらのおかげでな」

くいと顎でガルクが示すその先に、集まる地の精霊たち。

二人を取り囲むように集う彼らを、ミランはじっと見つめた。

彼らがこの二人を無傷で地面に下ろしてくれた。

大地の眷属である木々に、落下速度を緩めさせ、地に茂る草と土を異常にやわらかくすることで衝撃を和らげた。

「ありがとう」

感謝の気持ちを含めてミランが微笑めば、地の精霊たちも微笑んだ。「助かった」

ガルクも心の底から礼を言う。

彼らの助力がなければ、さすがにあの高さから飛び降りるなんて選択肢はなかった。

姿は見えなかったが、風と地の精霊が力を貸してくれようとしている気がした。

あの突如吹き抜けた風と、風に揺れる木が、ここを飛び降りろと言っている気がしたのだ。

おかげで無傷で城から出られた。後は、いかに城の敷地と城下町を抜けるかだ。

ふとそこで、地の精霊たちが一頭の馬を先導しているのに気が付いた。

ミランが急いで駆け寄れば、その黒毛の馬が嘶く。

おそろおそろ触ってみれば、艶やかな毛並みは見た目通りのさらさらした素晴らしい手触り。過ぎない足は、がっしりしていてとても速く走れそうだ。

「こりゃ・・・最高級の軍馬だな・・・」

いつの間にやら傍らに立っていたガルクをミランが振り返った。

ガルクは興味津々な表情で、馬を眺めている。

「乗って行けて・・・こと、かな？」

ミランが確認するように地の精霊に問えば、肯定するように頷かれる。

「ずいぶん手回しがいいな・・・？」

不思議に思ったのか、ガルクが首をひねりながらミランに問いかける。

「え？僕何もしてないよ」

「オレだってしてねえよ」

二人は互いに首を傾げる。

自分たちのどちらかが地の精霊に馬を連れてくるよう頼んだのであれば、どうしてこんなにナイスタイミングで現れるのだろうか。

「まあいいか。考えるより先に、さっさとここから脱出しないと存外あっさりと考えることを放棄して、ガルクは悠々と馬に跨る。

「おい、乗れ」

「え？馬なんて乗ったことないよ！」

「誰が一人で乗れって言った。安心しろ、おまえが一人で乗れるとは最初から思ってたねーから。つーかそもそもここには、この一頭しかいないだろうが」

呆れたような表情で、ガルクが馬上からミランに左手を差し出す。ミランは一瞬ためらってから、そうつと差し出された手を握る。

ガルクはすっぽりと小さな身体を抱き込むように、ミランを自分の前に座らせた。

「ちょ、ちょつと待って。これじゃ僕掴まるものがないっ！」

「オレの手にも掴まってる。安心しろ、落としゃしねーよ」

後ろを振り返ったり座り方を変えたり、落ち着かないミランを黙らせると、手綱を握った両手に力を込める。軽く手綱を引けば、馬が高く嘶いて走り出した。

その時、後方から追って来た兵たちの声が聞こえた。

かなり近くまで迫っていた兵士たちは、馬が走り出したのを見て慌てて後を追いかける。

それをちらつと確認したガルクは、馬の前を滑るように先導する地の精霊にすぐに視線を戻した。

おそらく城門まで案内してくれているのだろう。

途中、前に立ちはだかる兵士たちの頭上を飛び越えたりしながら、ガルクは王宮騎士も真つ青な見事な手綱捌きで城内を駆け抜けた。

「……おい。気、失ってねーか？」

走り始めてから一言も発することなく、身体を硬直させているミランに声をかける。

ガルクがミランを抱えている状態なので、ミランが掴まれるものと言ったら、馬の背か両脇の下に通されたガルクの両腕ということになる。

今ミランはガルクの腕にしっかりと掴まっている状態なので、その必死な掴まり具合からして、気は失っていないことは確かだ。

「ま、口は閉じてたほうがいいから、そのまま黙ってるよ」
反応のないミランに一方的に言うと、ガルクは馬の速度をあげた。
前方で今にも城門が閉まるうとしているからだ。
あとはまっすぐ門まで突っ走ればいいにしても、まだそこまでの距離は大分ある。

それに石畳の坂を全速で駆け下りるのは、馬に負担が大きすぎる。
これ以上無茶をすることも出来ないとして、ガルクは門を閉めようとしている兵士たちに火傷を負わせる程度の火を繰り出そうとしたが、その時何故か周囲の兵士たちは全て、何かに躓いたかのように、もしくは何かに足をすくわれたかのように派手に転んだ。

「はっ?!何?」

思わず口をバカみたいに開けてガルクは呟いた。
だが、おかげで門は閉じられないままであったので、そのまま勢いを殺すことなく城外へ滑り出る。そしてまっすぐ、王都の出口へとわき目も振らずに向かう。

ただ、走りながらも先程の奇妙な出来事が気になって、ガルクはちらとだけ視線を後ろの王城へ送る。

すると王城から二羽の鷹が、西と東の方角へと飛び去ろうとするのが目に入った。

「・・・くそっ、もう合図出しやがった」

西には自分の生まれ故郷の村が。

東にはミランの生まれた村がある。

あの二羽は間違いなく、村を攻め落とせという命令の記された勅書を持っていく。

手紙だけでも燃やしてしまいたいところだが、今のこの状態では上手く力が使えない上、相手は遠く離れた空の上。ほぼ不可能と言ってよかった。

それにおそらく、この後早馬が出されるはずだ。

緊急時において用いられる伝達手段。鷹と早馬。空と地上の両方からの連絡線は、どちらか片方を断っても意味がない。

出来うる最善のことは、その連絡が行き着く前に自分たちが村に辿り着くことのみ。

ガルクは息を詰めると、もう一度強く手綱を握り直し、前を見据えた。

*

*

びゅうびゅうと冷たい風が吹きすさぶ山の上で、彼女は遙か遠く下にある王都を眺めていた。容赦のない風は、彼女の全身を覆うマントを吹き飛ばす勢いでまくりあげるが、当の本人は煩わしさを感じている様子はなかった。

緯度も高く、標高も高いせいで植物がほとんど育たぬその山は、ごろごろと大きな岩ばかりが転がる灰色の砦。

王都の人間がこの山を「死の山」と呼んでいることは知っていたが、彼女にとってそんなことはどうでも良かった。

彼女の一族はここで生まれ、育ち、そして去っていく。

彼女の一族に「定住の地」と言うものは、およそ存在しない。

それは多分、その身に強く受け継がれ続ける性質によるものなのだろう。

それでもいつか来る日のために、唯一彼女たちに会える「場所」として維持し続けてきたここも、しかし今日でなくなる。

「……動いたわね……」

一際見晴らしのいい場所の大岩に腰掛けていた彼女は、ゆっくりと立ち上がった。

その拍子に頭に被っていたマントがはずれ、隠されていた長い銀髪がさらりと風に舞う。

白いきめ細かな肌の上を流れるように落ちる銀髪は、人の造形を超えていると思うほどに美しく、幻想的だ。感情の色の見えないアシュグレイの瞳が、その人間離れした容貌を際立たせている。

「私も……そろそろね……」

呟いて彼女は後ろを振り返る。

らしくないと言え、らしくない行動なのだが、やはり彼女たち一族にとつて特別であつたこの場所には、それなりの愛着があつたのかも知れない。

ここは、かの人に戴いた絆の証。

誰にも縛られぬ、とても心地の良い風の吹く場所。

けれどももう、その風も吹かなくなつた。

そして同時に絆も切れる。

彼女はマントを被りなおし、下山する為に一步を踏み出した。

今度は、二度と振り返ることなく。

第十三章：迷いの夜

パチパチと火の爆ぜる音を聞きながら、ミランは座り込んでじつと焚き火の向うに寝転がるガルクを見つめていた。完全にこちらに背を向け、まるで「話しかけるな」と言わんばかりの態度に声をかけるかどうか迷う。

「……何だ？さっきから鬱陶しい」

するとくるりと寝返りをうったガルクが、その燃えるような赤い瞳をミランに向ける。

「あ……うん。あと、どれくらいで着くのかな……と思って……」

「リベル半島に入ったから、あと二日か三日だろう」

ここに着くまでで七日。

夜以外はほとんど休むことなく全力で駆けてきたおかげで、王都に行く時には1ヶ月かかったものを、たったの数日で済んだ。

それでも既に勅書は村を囲む兵士たちに伝わっているだろう。

「聞きたいことはそれだけか？ならオレは寝るぞ、疲れてるから」

「あ、そうだね。ごめん……」

馬に乗った経験のないミランが、全速力でかつとばされる馬に乗り続けていられるはずもなく、当初はあっさり意識を手放して、気付いたら周囲は暗くなっていたなんてことばかりだったのだが、そうなると負担は全部ガルクにかかる。

ここ二日ばかりになってようやく意識を飛ばすことはなくなったが、それでも過度な緊張をして馬やガルクに負担をかけていることには変わらない。

思い出したら自分が情けなくなつて、ミランは俯いた。

自分は本当に彼に甘えてしまっている。

彼がいなければ、自分の村に帰ることさえ出来なかったかもしれない。

「……何で……」

ポツリと無意識に出た言葉に、ガルクが反応した。

「ん？」

促すように言えば、ミランは驚いて顔をあげた。

口に出して言っているとは思っていなかったのだ。

「どうした？」

「……あ、その。僕はガルがいなきゃ、何も出来ないんだな……って」

「……そうでもないぞ。おまえがいなきゃ、飲み水を確保する為にあちこちによって余計な時間を割いてた」

「それは、別に僕個人が出来ることじゃなくて……力を貸してもらってるだけだから」

「それでも、普通のヤツには出来ないことだと思っただろうか？」

ミランが何を言いたいのかわからないのか、疑問符を飛ばしながらガルクはミランを見上げる。依然彼は寝転がったままで、ミランは下から見上げてくるその視線から逃れようと横に顔を逸らした。

「僕は馬に乗ることも出来ないし、世の中のことも知らないし……」

途中でよった村は内乱や他国の侵略の影響が色濃く見え、ミランは驚いたのだが、今は大体どこも同じようなものだと言っていた。ガルクは言っていた。

大陸のはずれの水の豊かな土地で生きてきたミランには、想像も出なかった世界。

王都へ向かう時は、馬車の中で揺られるだけだったから、そんな光景も見ることにはなかった。けれどこれが現実。

王都と、大陸の端でたまたま影響の少なかったフスク村だけが、豊かに過ごせていたのだ。

「偉そうな事……言えないよ……」

懺悔するように、ミランは頭を垂れた。

「……おまえが何も知らなかったのは本当だけど、何もそれが全て悪いわけじゃない。知らなかったからこそ、変に屈折して育

たずにすんだかもしれないしな」

「でも」

「不満だと思うならこれから知ればいい。でもおまえをこういう風に育ててきたことには、多分間違いはないはずだぜ」

「……？」

「満たされることを知らない人間が、幸せだと、ありがたいと思うことを知らない人間が、自分以外の誰かを掛け値なしに助けることは出来ないだろう？おまえには力や知識が必要なんじゃない。そんなものより、その『心』が大事なんだ。『水の賢者』にはな」

「……え？……よく、わかんない……」

「そのうち分かる」

面倒くさくなつたのか、単に言いにくかつたのか、それだけ言つて話しを切ると、ガルクは再び寝返りをうつた。

「……ねえ。ガルは何でこんなに助けてくれるの？」

もう見慣れた大きな背中中に問いかける。

「ガルの村だつて危ないのに。何で一緒に来てくれたの？」

ずっと聞きたかつたことを、この際だから一気に聞いてしまおうと思つた。

答えを待ち望んで黙っていると、今度は振り返らずにガルクが呟く。

「約束だからだ」

「約束？」

「遠い昔の」

「……もしかしてそれは、最初の賢者に関係あるの……？」

「……書物には残されていない。けど賢者には賢者の絆も、情もある。それをおまえが知らないだけで。特に……火の賢者……イグニス・ヴィシユアと、フラッド・スウォールには、地と風とも違う絆があるんだ」

「……」

とつとつと語る声には、これといった感情は読めない。

でもこれでミランは納得できた。

約束。そう、それならばこの意外に義理堅い彼が守らないわけがない。

「……そつか。そつか……うん」

納得した答えをもらえて気が晴れたんだから、ちょっと悲しいと思うなんて気のせいだ。

ミランはごろんと地面に横になった。

星空でも見上げたかったのだが、生い茂る木々に囲まれてほとんど見えない。

横たわる二人には掛布はなかったが、そんなものなくても十分暖かった。

そもそもガルクと一緒にいるようになってから、寒さで震えることはなくなった。

パチパチ、パチパチと焚き火の音だけが夜空に響く。

「……おい」

面倒くさそうな声が、焚き火の反対側からかけられる。

「え？」

今度は自分も寝転がってしまったし、彼もこちらを向いてはくれないから、大分聞き取りにくかった。だから少しでも聞き取りやすいように、身体をガルクの方に向ける。

「勘違いすんな。オレは約束だからって、やらんでいいことまでやるほどお人好しじゃねえ。たとえ約束だろうと、おまえ自身にその約束に値する価値がなけりゃ、さっさと見切りつけて帰ってた」

「……」

それはつまり、ミランを認めたから今ここにいるのだと考えていいのだろうか。

過去の偉人の影ではなく、少しでも自分を見てくれていると。

思いがけない言葉にミランは呆然とし、そして嬉しそうに笑った。

「……へへ……」

「……笑ってないで、さっさと寝ろ」

「うん」

背を向けられたままであるが、その背中では自分を拒絶していない。頼っても、いいのかもしれない。

そして自分は自分のままで、いいのかもしれない。不安と緊張でうまく眠ることは出来なかったけれど、少しだけ胸のつかえが取れた気がした。

第十四章：存在せぬ名

賢者二人がそんな会話をしている頃、その時点ではフスク村はまだ攻撃を受けてはいなかった。

勅書を持ってくるはずの鷹と早馬が、何故か色々な妨害を受け順調に進めていなかったからである。

周囲を騎士団に包囲されながらもまだ静かな夜に、ミランの祖父は部屋の窓から夜空を見上げた。

「もうすぐ……もうすぐ、か」

もうすぐ何もこの目に映すことは叶わなくなる。

必死で帰ってきてきている孫にも、二度と逢えない。

空も地も、どちらも出来得る限りの力で彼らが抑えてくれているけれども。

彼らの力も万能ではない。

「それでも力を尽くしてくれている彼らに、せめてもの感謝を」

自分たちがいなくなれば、あの子は悲しむけれど、彼らがいればきつと大丈夫だ。

悲しみに負けずに、立ち上がってくれと信じている。

そっと節くれだった皺々の手を、水盆の中にひたした。

「のう、ミラン……。人が一人で出来ることなど、限られているんじゃないよ。けれど小さな力も、沢山集まれば大きな力となる。それを忘れないことじゃ

」

*

*

クリスはたった一人回廊に佇んで遠き東の地を眺めていた。

王城の最も高い階の、最も東にある、回廊の行き止まり。

風通しも良く見晴らしも良い場所だが、城の端にあたるので人気はほとんどない。

ここに来て既に一時間以上はたっていたが、まだ離れようとは思わない。

少しでもかの人の赴いた場所の近くを向ける場所にいたかった。

それが何故なのかは、いまだに分からないが。

「ここにいましたか。クラウ・ソラス」

不意に後ろからかけられた声に驚き、勢い良く振り向く。

そこにはいつも王の傍らにいるフードの人物がいた。

長身のクリスでは自然見下ろす形になるので、慌てて石造りの床に片膝をつこうとする。

「やめなさい。私はその礼に値する者ではない」

「しかし・・・」

「貴方の忠誠が向かう先は、私ではないでしょう？クラウ・ソラス」
淡々と紡がれる声には、揶揄の響きは感じ取れない。

納得はいかなかったが、当の本人が望んでいないのでクリスは膝をつくのをやめた。

それでも最低限の礼をとって、胸に手をあて一礼する。

「まさかこのような所においでになるとは思いませんでした」

「貴方がこちらにいると思いましたが」

「私に御用でしょうか？」

「そうですね。・・・ずっとここにいたんですか？」

目深に被ったフードのせいでもどこを見ているのかは分からないが、

その瞬間ふつとその視線がクリスの後方 東の地を捉えた気が

してクリスは戸惑った。

「はい・・・一時間程」

「何をしていたんです？」

「・・・何も・・・ただ、ここに立って」

「眺めていましたか？東のはずれのかの地を」

「ずばり言い当てられてクリスはギクツとした。

クリスの動揺が分かったのか、フードの下からくすつと笑いが洩れた。

「気になりますか、かの地が？」

「……い、いえ……」

「失礼。質問を間違えましたね。そんなに気になりますか、あの人が？」

今度こそ確信をつかれてクリスは黙り込むしかなかった。

「答えたくても、答えられるわけがありませんね。貴方は王の片腕だ」

「……」

「そう、話は逸れてしまいましたが。私は貴方に聞きたいことがあったんですよ」

「聞きたいことですか？」

「ええ」

フードの人物は頷いて一拍の間を置く。

「クラウ・ソラス……これは、貴方の元々の名前ではありませんね？」

「!!!？」

まったく予想もしなかった話が出て、クリスは思わず目を見開いた。次いでその顔からざつと血の気がひく。

周囲に人の気配がないことを改めて確かめて、クリスは緊張した面持ちで目の前の人物をみつめた。

「……何故、そのようなことをお聞きになるのですか？」

「確認の為です。そのような名前が、今現在存在することはありえませんか。それで、私の問いの答えは？」

確信を得ている感じの問いかけに、クリスは取り繕っても無駄だと悟った。

「確かに、その通りですが……存在しない名とはどういう事ですか？貴方は何を知ってらっしゃるんです？」

「今私たちが使っている言語に、クラウ・ソラスという言葉はない

んですよ。世界中のどこにも。実際、貴方はその言葉の語源も意味もさっぱり見当がつかないでしょう?」

「……はい。その通りです」

「元々それは、この国の創建時に使われていた古代ネヴェズ語に端を発する言葉です。古代ネヴェズ語において、クラウは『無垢』を、ソラスは『光』を表します。つまりクラウ・ソラスとは 輝ける白の意。けれどこの言葉の本当に重要な所は、同じ言葉が精霊の使う言語に存在するということです」

「……精霊に言葉などあるのですか?」

「勿論。と言つても、我々にはそう聞こえるというだけです。本当はそれは言葉ではないのかもしれませんが。それはともかく……ここでのクラウ・ソラスとは『不敗の剣』という意味を持ちます。敗れること無き、力の源」

『不敗の剣』という言葉に、クリスがびくりと反応した。

頭の中で、火の賢者が去り際に言った台詞が思い起こされる。

「……『不敗の剣』……」

「絶対的な力を象徴する言葉とでも言いましょうか。けれど、そこに込められた真の意味は、私では知ることは出来ません。その本当の意味を知っているのは、当の『不敗の剣』と……そして、水の賢者だけです」

「……み……水の賢者?!と、私……ですか?!」

「生憎とどちらも忘れていたようですが」

「ま、待つて下さい!何故そこに水の賢者が……つ!!」

慌てて問い返すクリスを見て、フードの人物が首を傾げた。そして納得したように、ああと頷く。

「クラウ・ソラスとは、かつて水の賢者によってある人物に、何重もの意味を込めて与えられた名です。もともと剣は水と共に在るものだった。名はその契約であり、絆。故に本物の『不敗の剣』は、水に惹かれる」

本物のという部分をやけに強調して言われた気がして、クリスは無

意識で首を傾げた。

フードの人物は顔の向きをクリスから、その右斜め後ろにある東の地へ向けた。

「……貴方のその名、ただの偶然かとも思いましたが……あの時、貴方は確かに水の賢者に惹かれていました。そして今もその心は彼と共にある。もはや否定する理由もない。貴方は間違はなく『不敗の剣』です……」

フードの下から告げるその声はかすかに諦めの色を含んでいた。

自然と俯く視線の先に、この城に似つかわしくない白い軍靴がある。黒く腐敗した中にただひとつ迷い込んでしまった、白。

本来異質であるはずのその白は、自らの意味と価値を知ることなく、蠢く闇に呑み込まれてしまった。

「……あの……?」

遠慮がちに上から降ってくるクリスの声にも反応せず、俯き溜息を洩らす。

伝承の書を受け継ぐ自分でも、このような状況を予測することは出来なかった。

「……これが、運命なんでしょうか……貴方と私の」

「……?」

たっぷり間をあけてぼつりと零れた言葉の意味が、クリスは良く分からなかった。

フードの人物はゆるゆると首を振ると、踵を返した。

そのままこの回廊から立ち去るのだと思われたが、急にぴたりと立ち止まって、振り返ることはなくクリスに話しかける。

「……剣の役目を知りなさい。貴方の存在は危うい均衡の中にある。選択を間違えれば貴方自身だけでなく、この世全てを道連れに破滅するしかありませんよ」

それだけ言つと、今度こそ立ち止まることなくこの回廊から去っていった。

残されたクリスは、突然突きつけられた事にわけが分からず、フー
ドの人物が去った先を見つめ続けていた。

第十五章：嘆きの海

「早く！！早くガル！！！！」

「分かつてる！！」

全力でかつ飛ばされる馬の上で、ガルクの背中にしがみつぎ舌を噛みそうになりながらミランは声を張り上げる。

そうでなければ風にかき消されて声が届かない。

ガルクの胸に回された両腕が痛いほどの強さで抱きしめてきたが、ガルクはその苦しさにならずに顔をしかめただけで何も言わずにひたすら駆け続ける。

ガル！！！！どう・・・どうしようっ！！！！

は？なに・・・

村・・・村が！！大量の水が動いたって・・・精霊の声・・・

・みんなが！！！！

昨夜、いつものように休もうと手頃な地面に寝転がっていたら、何かを感じ取ったらしいミランが蒼白な顔でガルクに詰め寄ってきた。その尋常ならざる動揺ぶりに、本来ならありえない異変が起きたのだと悟ったガルクは、すぐさま馬に乗り夜通し森の中を走り続けた。空が明るんで景色がはつきりしてきても、木々に囲まれ見通しの悪い森の中では今自分がどこを走っているのか見当がつかない。手綱を握り締め続けた手は、緊張と疲労で既に限界が近かった。

「・・・くそっ、まだか？！！」

フスク村は山を背にした湖のほとりがあると聞いていたが、その湖が大きすぎて位置の特定が出来ない。湖からつかず離れず、山を見上げて走り続けてきたが、それらしい村の姿どころか人の気配すら感じ取れてはいなかった。

「止まって！！降ろしてっ！！！！」

震える声が聞こえて、ハツとしてガルクは馬を止める。

その動きが完全に止まる前に、ミランは青い髪を振り乱し転がるように馬上から降りると、ガルクを振り返ることなく一心不乱に木々の間を走り抜けていく。

「おいっ！」

焦ったガルクは急いで馬を近くの木に繋ぐと、慌ててその後を追いかけた。

だがあつと言う間に小さな身体を見失ったガルクは、ちっと舌打ちして頭を乱暴に搔く。

「あのバカ・・・一人で勝手に行きやがって！」

一息に吐き出すと、足を止め周囲をきよるきよると見回す。

草を踏むガサつという音が静か過ぎる森の中に響く。

音もなければ熱もない。人の気配どころか生物の気配そのものがここにはなかった。

この場に立っているだけで、異常な事態が起こったということが分かる。

胸の奥に湧き上がった嫌な気持ちに顔をしかめた時、高く細い悲鳴が耳の奥を劈いた。

「・・・っミラン・・・?!」

その声が少年のものだと認識する前に、ガルクは猛然と声の方向へと走り出した。

虚ろな空間に響く胸を裂くような甲高い声は、前から後ろから空から地面から、どの方向から聞こえてくるのかも分からぬ程に木霊している。

がさがさと草を掻き分けて走った先に、木々の隙間から巨大な湖が見えた。

湖面に反射する朝日の眩しさに目を瞑る。速度を緩め近くの木の幹に寄り掛かるように左手を添えた。

臉を貫く光が一層強くなったと感じた瞬間、慟哭の音がさつきよりもはつきりと聞こえた。

「……ミラン？」

右手を目の前に翳して目を開けると、開けた空間に一面の湖が広がっていた。

そして青く輝く水の中に同化するように、ぽつんと小さな身体が水に両手両膝を浸して顔を伏せていた。

ミランの姿を見つけるとガルクはひとまず安堵の息を吐いた。そして足元まで侵食している水に入らぬように気を払いながら、周囲の状況を確認しようとするりと首を廻らす。

左手に見える山は、中腹あたりから地滑りでも起きたかのようにこつそりと土ごと斜面が削られている。

「……！！？」

瞬時に何かを悟って、ガルクは山から視線をはずす。

足を良く見てみれば、浅い水の中にたくさんの木片が浮いていた。20メートル程先にいるミランも、水の中で四つん這いになっている。

それはつまり彼は湖の中ではなく、広く浅い水溜りのような場所にいるということだ。削れた斜面、水の中を漂う木片の数々、広がる浅瀬、ここに何かがあったことを示すようにぽっかりと空いた空間。

これだけ見れば、ここで何が起きたか推測するのは簡単だった。

泣き続けるミランに声をかけるのを躊躇って、傍に行こうとガルクが一步水の中に足を踏み入れたその瞬間周りの状況が一変した。

『行け　！一人も逃すな』

地を這うような低く太い声が轟くと同時に、号令に呼応して甲冑の集団が一斉に駆け出した。地を揺るがすほどの足音に、その小さな村はあつと言う間に呑み込まれ、防御の役目を持たぬ家々はなす術も無く蹂躪される。

『女子供とて容赦はするな！陛下の勅命ぞ！！』

心無き声に忠実な騎士たちは、武器も持たぬ幼き命をためらう事無

くその手に屠る。

争いなど遠い世界のことであつた平和な村は、今断末魔の悲鳴で満たされていた。

『戦えるヤツは、何でもいいから武器を持って、やつらをここで食い止める!!』

『長老たちが準備を終えるまでだ!通すなよ!!』

丘の上の長老の家が続く坂道を、村の若者や男たちがその身を盾に必死で塞ぐ。

騎士と村人ではその力は歴然、次々と兇刃の前に血を流し倒れていく仲間を見ながら、それでも彼らはその命が尽きるまで立ちほだかり続ける。

勝てるとも、この殺戮から逃れられるとも思つてはいなかったが、彼らはただ倒れるわけにはいかなかった。

「……な……なん……だ、これは?!」

目の前で繰り広げられる壮絶な光景を見て、ガルクは息を呑んだ。突然の出来事に頭がうまく働かなくて呆然と佇むガルクの真横から、一人の騎士が剣を振り上げ襲ってくる。視界の右端でその動きを捉えたガルクは動転のあまり反応が遅れ、振り下ろされる剣を右腕に受けた。

「……っ……あ?」

だが痛みを覚悟したその右腕を、剣は易々と通り抜けた。

それどころか斬りかかって来た騎士が、ガルクの身体を通り抜けて行く。

「はっ?!え?どういうこと……」

思わずガルクは自分の身体の彼方此方に触れる。きちんと感触があるので、自分の身体が消えかかっているとかそういうことではないらしい。

そうこうしている間にガルクの身体を他の騎士や村人たちが通り抜けて行く。

「……幻影か、こいつらは……」

触れることは出来ないが、実際に目前に広がる光景。

おそらくこれは、自分たちが辿り着く前に村で起きた実際の光景だ。ようやく今の状況が理解出来たガルクは、遠く離れた村の中央あたりに座り込むミランの姿を見つけた。

「ミランっ!!」

名を呼んで走り寄る。

俯き嘆くミランの傍らに寄り添うと、再び光景は一転した。

「・・・今度は何だ!？」

呻くガルクの視線の先に、幾人もの子供や女性、男性に囲まれた一人の老人がいた。

広い部屋の中で静かに集まり寄り添う人々。

この建物の外では相変わらず悲鳴が聞こえており、窓から外を覗けば坂の下で攻防を繰り返す村人と騎士の姿があった。ここが彼ら在必死に守ろうとしている場所だ。

『長老様、騎士たちは全員村の中央付近に集まっています』

全身に怪我を負いながら部屋に飛び込んできた青年が、人々に囲まれている老人に向かって言った。部屋の中全体に緊張が走る。

『そうか・・・もう、時が来たようじゃの』

全てを悟ったかのような落ち着いた表情で、老人はゆっくりと部屋の中を見渡した。

『では、すまぬが皆儂と共に来てくれるか』

問いかけに、その場の全員が静かに頷いた。

『どのみちこのままでは私たちは生き残れないでしょう。もし生き残れたとしても、ミランの足枷になるのは目に見えています』

『戦術を知らない私たちは、あの子の重荷にしかたありません』

その通りですと口々に呟く声が広がる。

不安と恐怖を打ち消すために、言葉にすることで覚悟を決めようとしたのかもしれない。

怖くないわけがなかった。

死にたいはずがなかった。

出来得るなら逃げて逃げて、どこまででも逃げて生き延びたかった。けれどそれは出来ないのだ。逃げる力も無い、逃げてでも戦う力が無い。

ただ少年を脅す為の道具として、いつ殺されるかもしれない恐怖と共に少年の枷となることしかできない。

『あの子のお荷物になるのは御免ですよ・・・私達の半分も生きていない子に、そんな辛いことさせるわけにいかないじゃないですか・・・』

どう足掻いても望む道を選べないのなら、最善の道をとるのだ。

『・・・ありがとう。これほど皆に想われて、あの子は幸せじゃない』

老人は心底嬉しそうに微笑むと、ゆっくりと目を閉じた。それにあわせて全員が目を瞑る。

最期の最後に力を合わせて、水を動かす。遠く山の中腹で、塞き止められた水がその堰を切って流れ出す音を聞いた。

『無残な姿をあの子に晒すわけにもいくまい。全てを水に流し、我らもまた水へと還ろう。・・・ミラン、どうか』

どどどど、と迫り来る轟音に最後の呟きは掻き消された。

そして村はあつと言つ間に激流に呑み込まれた。

第十六章：迫る影

そこで幻影は消えた。

目を瞬かせて辺りを見ても、やはり何もないうまま、喧騒も無くミランの泣き声だけがむなしく響いている。

「・・・つく・・・ひ・・・つ　　さま・・・じ・・・さま・・・み・・・な・・・っ」

傍らで俯いて嘆き続けるミランを見て、ガルクはなんとなく、さっきの幻影はミランが見せたものだろうと思った。

ミランは水を通して過去の記憶を見て、その時に同じ水の中に足を踏み入れた自分も同じ記憶を共有したのだ。

「ミラン・・・」

何を言ったらいいかなんて分からなかったが、不意に名前を呼ぶ声がか自分の口から洩れた。

その後続く言葉を持たぬまま、口を開いては閉じ開いては又閉じる。

「っ・・・く・・・ふ・・・うえっ・・・さま・・・てかな・・・で・・・」

身を切るような悲痛な泣き声が胸の奥を突き刺す。

泣くなどとは言えなかった。

いくら公然と王に歯向かったとしても、ミランにはこの結果を受け入れる覚悟など出来てはいなかったはずだ。人の命を背負う覚悟も。

「じいさま・・・かあさま・・・うっ・・・ふう・・・くっ・・・ひっ・・・」

伏せた顔の両の目から零れる涙が、朝日に照らされて輝きながら水の中に消える。

しばらくただ佇んでいたガルクは、やがて何も言わずに静かに踵を返し森の中へと足を向けた。泣き続けるミランはガルクの動きになど気付きもしない。

今は押し寄せる感情の波に浸ることに一杯で、何を言おうが何をしようがミランに届くことはない。ガルクはそれを知っていたから、せめて今日は何も言わずに好きなようにさせることにした。

溢れる涙を止める術を彼は持たない。ミラン自身で乗り越えるしかないのだ。

だからガルクはその場を離れた。

乗り越えるだけの時間を与える為と、残された者としての義務を果たす為に。

さしあたり今の彼に出来ることは、軍の痕跡を調べることとこの先自分たちはどう動くべきかを考えることだった。

*

*

「帝国軍の前線が上がってきている？」

普段であれば穏やかで聡明な光を宿す青年の薄茶色の瞳が、予期せぬ驚きに焦りの色をたたえ大きく見開かれた。上半期の村の予算を計算し直していたのだが、それも忘れ、思わず書類に埋もれる机に身を乗り出す。瞳よりは濃い茶色の髪がさらりと揺れた。

机の目の前に立ち、青年の視線をしかと受け止める体格の良い壮年の男が、重々しく頷いた。

「はい。ダーナ国軍の斥候隊からの情報ですが、つい最近五キロ程進軍してきたそうです」

「・・・五キロ？」

「はい。こちらからの動きがないので、おそらくは軍をおびき寄せる挑発の為の行動だと思われます。まだ国境城砦との距離はありますので、今すぐ戦禍が広がるという恐れはありません」

はつきりと言いつつ切った男は、目の前で表情を曇らせた年若い村長を無言で眺めた。

王都の南に位置する治安も気候も穏やかなこのフリディス村で、常ならばこの若い青年も十分に長の務めを全うできただろう。けれど南方のネヴァン帝国が侵略の動きを見せる今、南方国境に近いこの村でのその仕事はかなり荷が勝ちすぎていると思えた。

「王都に連絡はいつていますか？」

「既に早馬を飛ばしたと守備隊長殿から伺っております」

明快な答えを聞いて、青年は顎に手をやり思考の淵に沈んだ。

沈黙がその場を支配するが、男はその静寂をやぶることはせず黙って青年の言葉を待った。

「……では、村の備蓄食糧をいつでも出せるように手配しておいて下さい。足が速くて体力のある馬を五十頭程集めるのも願います。それと街道沿いの民家に一時撤退の告知を」

「は……。あの、キリクス殿は王が軍を動かすとお思いですか？」

「さあ、どうでしょうか。でも恐らく前線を押し戻す為に軍の一部は派遣されて来ます」

断言するキリクスに、男の方が困った顔をした。

「我ら『地の民』を脅かさない。そういう約束ですから。その約束を守る為に軍の部隊はやってきます。でなくば、僕がこの椅子に座っている意味がない」

最後の方の言葉は気のせいではなく苦いものを含んでいたが、窓から差し込む光に照らされたキリクスの表情は普段と変わらない穏やかなものであった。

「一週間で騎士団がやってくるはずですから、そのように心得ていて下さい」

「承知しました」

「あ、それと……。母の容態はどうですか？変わりありませんか？」

「はい。特に変わりなく、一日中臥せっておいでです。それでも

熱はひきましたから、少しは楽になったのではないかと思えます」
「そう。ありがとう」

ほっと微笑んだ顔はあどけなく、青年本来の優しさが滲み出ていた。その笑顔を見て男はわずかに表情をゆるめ、一礼すると、己の仕事を全うすべく足早に部屋を出て行った。

遠ざかる足音を聞きつつ、キリクスは無意識に机の一番上の引き出しに手を当てる。

すぐに自分のその動作に気付いて、苦笑した。

何十冊もの本に囲まれた執務室を改めて見回す。そして今自分が向かっている重厚なつくりの机を見下ろして、溜息をついた。

この椅子に座って見る景色に自分はいまだ慣れない。

それはこの地位に長く留まる気がないからなのかもしれないが、自分よりもこの椅子に相応しい人を知っているからこそ、余計に居心地が悪くてしょうがない。

己の不甲斐なさに再度溜息をついて、鍵のかかっている引き出しをそっと開いた。

小さいけれど、派手すぎず洗練された装飾の施された綺麗な深緑色の箱を取り出す。

中から覗くのは、たつぷりの綿に大事そうにくるまれた黄金色の石。博愛・思いやりの象徴たるチューリップの花を中央に刻み込み、友情・希望を表すインペリアルトパーズを模した深い黄金色のその石は、淡く光り輝いていた。

青年がそれを手に取ると、石は更に輝きを増す。

「・・・何で、僕がここにいるんだろうな・・・」

誰も聞きとがめる人がいないから、ぼつりと呟きを洩らす。

「族長なんて荷が勝ちすぎてるのに・・・」

先程男が思っていたことを、キリクスも考えていたらしい。

元々補佐としての勉強はしてきたから、いきなり族長の座に据えられても特に問題はなかったが、自分自身にあまり自信のないキリクスにしてみれば、「何で僕なんだ。勘弁してくれ」と言いたいところ

ろだ。

それでも母が倒れ、父が亡くなった以上、自分が役目を引き継ぐしかない。

ぼんやりと地の印章を眺めた後、キリクスは首を横に振ってそれを元の場所に戻した。

深呼吸をして気分を落ち着けると、やりかけの仕事を片付ける為にペンをとり、すさまじい集中力で次々と書類の必要事項を埋めていった。

第十六章：迫る影（後書き）

久しぶりの更新です。投稿のペースが遅くなっていますが、頑張っ
てコツコツ書いていきたいと思えます。

第十七章：遠征

キリクスが書類処理に没頭している同じ頃、王都ファイアナの王城では、王とフードの人物が帝国軍の動きについて舌戦を繰り広げていた。

「国境城皆までは距離がある。無闇に進撃して痛手を被ることもあるまい」

「ほう？まるで最初からこちらが帝国に及ばないともいうような口振りですね」

「そのような安い挑発にのると思うな。城砦の守りは強化してある。そう簡単に破れるものではない」

「ですがその身に火の粉が降りかかってからでは、遅い場合もございます」

冷酷にきつてすてる王に尻込みする気配も見せず、フードの下から玉座から見下ろす王を傲然と見返す。王の傍らに控えたクリスは、そのやり取りにやや不安そうだ。

「手を出さなければ出さないで、帝国は更に歩を進めてきましょう。つい最近賢者二人を敵に回した陛下としては、そう長い間国の外になど構ってらっしゃる余裕はないと存じますが？」

言外に、ここで放っておけば賢者たちと帝国軍、両方を同時に相手取ることになると脅している。その問題点にとっくに気付いていた王は、指摘をされて不愉快そうに眉を寄せた。

「だが、だからといって、王都の守りを手薄にするわけにもいかぬぞ。何か策はあるのか？」

「陛下は何の為に私をお呼びになったのですか？」

強気な発言が広間に響く。王は片眉をあげると、ついでにやりと笑った。

「愚問だったな。で、どうする気だ？」

「騎士団をお貸し下さい。特に騎馬に優れ遠矢の得意な兵を。指揮

は私自ら行います」

「……………それだけで良いのか？」

「いえ、それと、その白の騎士の同行を願います」

ふいと首の動きだけで玉座の右後ろのクリスを示す。クリスはその申し出に驚いて目を見開き、王は渋い表情になった。

「これは私の側近だ。私の身边を警護してもらわねば」

「おや？なんと度量の狭い。とても一国の主のお言葉とも思えませんね」

「きさ」

「何の意味もなく申し出ているわけではありませんよ。必要だと思つたから、そう申し上げただけです。ですが陛下が否と仰るなら、仕方ありませんね……………」
ふうと大げさに溜息をついて見せ、フードの人物はくるりと踵を返す。

やけにあっさり引き下がるものだから、思わず王も引き止める声を出す。

「待て！」

「はい？ご了承頂けるんですか？」

「内容による。何の為にクリスを連れて行くのか聞きたい」

幾分態度を和らげた問いかけだったので、去りかけていた身体を反転し、改めて王に向かいあう。じつと玉座を見上げ、たつぷり間をおいてから、フードの下から朗々たる声をあげた。

「普通、戦というものは、相手よりも多い人数を揃えた方が勝利します。それが最も単純な戦略であり、正道です。ですが私は今回あえて正道ではなく、奇手を用います。この場合の奇手とは、少数による大軍の撃破ですね……………さて、今回何故わざわざ奇手を用いるのか、分かりますか？クラウ・ソラス？」

突然名指して呼ばれクリスはびくつとした。けれどすぐに考え込むと、ぼつりと答えを返す。

「相手にシヨックを与える為ですか……………？」

「それもあります。が、それだけではありません」

「どうやら王もクリスと同じ事を考えていたらしく、何だ違うのか？と顔が雄弁に物語っている。

「正道による戦は、要は力と力のぶつかりあいです。数が多いほうが勝つのは自明の理なれど、被害も甚大。けれど奇手を用いるとなれば、やりようによつて被害は最小限度、もしくは皆無に抑えられます。無駄に人手を削ることが出来ない以上、被害を抑える戦法をとることがまず第一でしょう。そしてそれは同時に、相手に精神的打撃を幾重にもして与えることになります。少数部隊に大軍が追い返されれば、帝国はこちらの力量を計りかねて進軍を踏みとどまる。そうでなくとも、こちらの戦力に変わりが無いのに、帝国側が戦力を削られれば、やはり手を出しにくくなる。敵の士気を挫くには最も有効な方法です」

「・・・なるほど」

よくまあそんなことをあつさり考えつくものだ、王は感心して頷いた。

「そしてよりの確に効果的な打撃を与える為に必要なのが、その白の騎士です。人というのは、目に見える具体的なものがあると、そこに集中するように出来ています。これといって目立つ将のいない部隊よりは、名のある将の率いる部隊の方が、部隊の実力の程に違いがなくても恐ろしいものです。彼が少数の部隊を率いて、帝国軍を追い返す。そうなると当然帝国はダーナという国だけでなく、ソラス卿個人に警戒を強めます。『大軍を追い返したのは、あの白の騎士だ。彼の力量を見誤つてはいけぬ』。これで帝国はますます進軍に二の足を踏むことになる。そしてこちらは、白の騎士の存在そのものが味方の士気を高めることになる。・・・分かりますか？彼を将として据えることは、この戦略をより確実に成功に導くことに繋がり、王の傍らに白の騎士あり、と示すことが眼前の障害を掃うだけでなく、後の憂いを失くすことにも繋がるのですよ」

「いかがですか？」と聞かれて、それまで呆然と話を聞いていた王とク

リスは、はつと我に返った。よどみなく語られた内容が、自分たちが想像した以上のことまで網羅していてびっくりしてしまったのだ。クリスは目をぱちぱちとさせて、段下のフードの人物を尊敬の眼差しで見つめ、王は足を組み直しおもしろそうに笑った。

「つくづく敵に回したくないヤツよな」

「お褒めにあずかり光栄です」

言うほどには光栄とは思っていない態度で、しれっと王の言葉を受け流す。

「で、どうなんでしょうか？」

「お前のその態度は頂けないが・・・よかろう。そういうことなら、こやつを連れて行くがいい」

「はい。では、ありがたく」

黒いフードの下で初めて微笑む気配がした。あれだけケンカを売っているような、怖いものなしの態度をとっていても、やはり内心は王の不興を買わないか不安だったのだろうか。

クリスは王の傍らで呑気にそんなことを考えていたが、段下のフードの下から注がれる無言の要請に気付き、後ろ手に組んでいた手はずし王に向かって跪いた。

「勅命をもつて命ずる。クラウ・ソラス、汝は此度の南方国境城砦防衛線に将として赴き、帝国軍を退けよ。見事、その名と姿を奴らに恐怖の象徴として刻み付けてこい」

俯く金の髪の上を、年の割には低く重苦しい威厳に富んだ声が通り抜ける。幼い頃からずっと隣で聞いてきたこの声を、他の騎士たちとは違ってクリスは怖いなどと思ったことはないが、やはりこういう時は少なからず畏怖の念が込み上げてくる。

金色の玉座の足を視界の端に入れ、深紅の絨毯を見つめながらクリスは短く「御意」と答えた。一度深く礼をしてから立ち上がり、あまり高さのない階段を下つていく。

フードの人物の隣までくると、二人揃ってもう一度王に礼をし、謁見の間を出て行った。

二人が出て行ってしまうと、無駄に広い部屋の中には王と扉を守る近衛兵二人だけになってしまった。扉から玉座までの距離は結構あるので、王にとっては自分ひとりだけいるのと変わらない。

「ふっ・・・見事な頭脳と達者な口よ。私が軍を動かさぬとみると、動かさざるをえない方へ追い詰めよつた。まあ、実質我が軍に支障はなさそうだし、好きなようにさせてやるか・・・」

フードの人物の思うように動かされたようで多少不快ではあるが、こちらに不利になるようなことはなさそうなので、まあ良しとする。火の賢者も水の賢者も、今のところ自分たちのことで手一杯で歯向かって来る事はないだろうから、クリスが傍にいらなくても特に問題はない。王は南方城砦のことを既に完了したものととしてさっさと頭から追い出すと、国内の財政状況を向上する為の案について真剣に考え始めた。

一方謁見の間を出た二人は、黒いフードと純白の軍服という珍しい組み合わせに興味をひかれていた兵士たちの視線を浴びながら、フィアナ王宮騎士団の詰め所に向かっていった。

「騎士団内の選抜は貴方に任せますよ。百名程集めておいてください」

「百?! たつたそれだけで、どうやって戦など・・・」
カツカツと規則正しい足音を響かせながら、西の回廊を渡る。

「頭さえ働かせれば、たいていのことは可能なんですよ。既に遠征の為の糧食・武器、その他の物資については準備を終えています。斥候隊を送つての情報収集にも抜かりはないので、貴方がたはさっさと身支度を終えて下さい。準備が出来次第出発します。」

「陛下に遠征の許可を頂く前に準備を?」

半歩先を歩くフードの後姿を見つめ、クリスは感嘆の声をあげた。

「・・・今回に限っては、許可を貰ってから動いていたのでは遅いんです。色々」

「奇手を用いるという、その戦略は時間との勝負なのですか?」

「・・・いえ。それとは別件で」

そう言ったきりフードの人物は口を噤んだ。

この人がこういう態度をとれば、もう何も話さないだろうことは短い付き合いながら分かっていたので、クリスは追求することを諦めた。

再び歩き始めれば、東からの涼風が金の髪をふわりと舞い上げる。

その心地よさに目を細めながら、クリスは西の渡り廊下からふと東の空を見上げる。王都を覆う分厚い灰色の雲は、遙か彼方の東の空ではその影すらない。心を衝くような青空に、まだあどけない微笑の少年を思い出した。

あの空より深い青の瞳の少年は、いまもあの空の下にいるのだろうか。

いたとしても、きっと深い嘆きの海に沈んでいるのだろうけれど。

クリスは無意識に腰に佩いた剣を握った。

王に忠誠を誓った身として、命に従ったことに後悔はしない。ただ無性に心が痛んだ。

第十八章：鎮魂歌

もうどれだけ泣いたのだろうか。

身体中の全ての水分が頬を伝って雫となって消えても、悲哀の声は尚も途切れることを知らない。そうすることで失った何かを取り戻せるかのように、ただただ泣いた。

天上が夜色の帳に塗り替えられても、柔らかな月の光が慰めるようにその身を照らしても、ミランはそれすらも知らないまま嘆き続ける。

押し寄せる悲しみに、何も考えられぬ頭で、いつそのまま水に溶けて消えたいと思った。

この胸にぽっかり空いた隙間を埋めてしまいたかった。

「っ……ッ……」

もはや掠れて声にさえならない嗚咽が夜風にのって空に消えた。

ミラン

突然耳に響いた優しい声に、ミランの肩がびくりと揺れた。

ミラン

もう一度。

ミラン

聞きなれた懐かしい声が、ミランの瞳に生気を戻す。

「………じ……さま……？」

呆然と呟きながら、伏せていた顔をゆっくりあげた。白い頬には涙の跡がくつきりと残り、泣き腫らした目は真っ赤で痛々しかったけれど、その目には確かに光が戻っていた。

「じいさま……」

応える声はもうないのだと、冷えた頭のどこかが告げていた。それでも探してしまうのは、覚悟なんて出来ていなかったからだ。その声をいつでも聞けると、当然のように信じていたからだ。

「じいさま……」

ふらりとミランは立ち上がった。泣き続けて体力を失った身体が、急激な体勢の変化に悲鳴をあげるが、それにも気付かず揺れる身体を支えて歩き出す。ゆっくりと、深い湖に向かって。

ミラン、人が一人で出来ることなど限られているんじゃないよ知っている。だって自分は今とても寂しい。

みんな、いつてしまったから。

一人にしないで、残していかないで。

いくなら一緒に連れていつてほしかった

！

ミラン、どうか・・・

ぴしゃんと水の撥ねる音がする。

立つ気力も失った細い身体が、重力に引かれてぐらりと前に傾ぐ。

このまま、一緒に・・・

どうか迷わず、為すべきことを

「・・・え？」

無防備に投げ出された身体は、水の中に沈む前にぐいつと強い力で引き戻された。

前に移動していた重心が今度は引っ張られた後ろに移動して、そのままの勢いでぺしゃりと水の中に尻餅をついた。伸ばした足の先には尻餅をつけるだけの地面などなく、深く底の見えない暗い湖が広がるばかり。

聞こえた声と突然の強い力に放心していたミランは、やがて自分の身体を支える力強い腕に気付いた。この先には絶対に行かせないという明確な意思の込められた、そして実際にミランを引き止めたその腕に。

「 つの、バカやろうツ！！！！」

耳元で轟いた怒声に、ミランは目を瞑り縮こまる。

「何しやがるつもりだった！このバカたれっ！！」

ごつんと容赦のない拳がミランの頭に振り下ろされた。瞬間、あまりの痛さに目がチカチカして、後ろから肩を抱くように回された手にしがみつく。

「・・・う・・・い、イタ・・・」

「痛いように殴ってんだから当たり前だ！これでちつとは目が覚めたか！！」

「がしがしと大きな掌がミランの頭を掻き雑ぜる。

「いたたたた！ホント、痛いから！離してよ！」

出尽くしたはずの涙が、あまりの痛さに目の端に滲む。先程までの、全ての感覚が麻痺したかのような自分が嘘のようだ。

「誰が離すか！」

「く・・・首！首絞まってる！！」

肩に回されていた腕がいつの間にか首周りに移動していて、喉が押しつぶされるかもと思うほど圧迫される。ただでさえ泣きすぎて喉が苦しいのに、これ以上何かさされたら本気で声が出なくなる。脳裏を一瞬よぎったイヤな想像に青くなり、ミランは自由になる手で必死に真後ろのガルクの頭をばしばしと叩いた。

「・・・・・・ガル！」

切れ切れの声で名を呼ぶと、不意に加えられていた力が緩んだ。ほつと肩の力を抜いたミランの頭にコツンと何かが当たる。

「・・・？」

「・・・・・・離して、平気か？」

威勢の良さが微塵も感じられない低い声が、頭の後ろでくぐもって聞こえた。微かな吐息にミランの細く柔らかい髪が震える。ミランは後ろを振り向こうとしてみたが、どうやらコツンと当たったのはガルクの額のように、完全に抱きこまれた姿勢のまま身動きがまったくとれなかった。

「離しても、もう大丈夫なんだな？」

再度、確認するかのように呟かれたその声にわずかな緊張を感じ取り、ミランはいたたまれなくなった。自分は彼にどれだけ心配をかけたのだろう。

「・・・うん。大丈夫」

答えて、小さくこくりと頷いた。

「……………そうか……………」

頭の後ろでほつと息を吐くのを感じ取ると、ミランを抱え込んでいた手がゆっくりとはずされた。温もりが離れてしまるのが寂しいと思いつながら、座り込んだままミランは後ろを振り返る。そこには自分と同じように水の中に座り込んだガルクがいた。

「ガル……………」

「って言うと思ったか、このボケ!!」

話しかけようと思った矢先、またも盛大な怒鳴り声と共に怒りの鉄槌がミランの頭上に振り下ろされた。ごいんと鈍い音が静かな夜空に響き渡る。

「… ったあああ!! な、何すんの!!」

「うるせー!!!! いくら殴っても殴りたらねーよ!!!! このバカ! この小さい頭には何が詰まってるんだ! 空っぽか?! おまえ、オレが見てたから良かったものの、このまま行ったら即土左衛門だぞ!! いくら水の賢者って言っても水の中じゃ息出来ねーだろうがっ!!!!」
ガルクはがしつとミランの顔を掴むと、力任せに湖の方を向かせる。
「いいいいいたたた! 首もげるっ!!」

「言う言葉はそれかっ?!」

「あつうつ、ご、ごめんなさいーっ!!!!」

半泣きで絶叫すると、顔の両側からぱつと手が離れた。無理矢理引っ張られた首が痛い。

ミランは痛む首と両頬を撫でながらじつとガルクを見上げる。

「このバカ! このバカ! このバカ!!!!」

「……………つバカバカ連呼しなくても……………」

「バカをバカと言って何が悪い! おまえ、あの光景見たんだろうが!!!! なのに自分から命捨てに行こうとするなんて、ただのバカよりタチわりぞ!!!!」

「捨てになんて……………」

「ああ?! じゃあ何で湖に行こうとした? 『一緒に行きたい』とか思ったからじゃねーのか!?!」

容赦ない言葉の攻めに凶星をさされ、ミランは顔を俯ける。その態度を見てガルクは、はあーっと盛大な溜息をついた。

「顔上げる」

「・・・・・・・・」

「こつち見る、ミラン」

「・・・・・・・・」

有無を言わせぬ口調に、渋々ながらミランは顔を上げる。烈火の如く怒ったガルクを想像していたのだが、実際に顔を上げて見た彼の顔は、至極真面目なものだった。

「オレはこの村が沈む直前の光景を見た。それはおまえも見たはずだな？」

思い出したくない光景が脳裏によぎり、ずきつと胸が痛む。泣かないうちに歯をくいしばって、ミランはこくと頷いた。

「なら、分かるだろ？みんなは何の為に戦っていた？彼らは誰のために覚悟を決めた？全ては誰のために、何のために？」

問う声はもう怒りを含んでいなかった。

諭すような低く静かな声でミランに答えを求める。

『あの子のお荷物になるのは御免ですよ・・・・私達の半分も生きていない子に、そんな辛いことさせるわけにいかないじゃないですか・・・・・・・・』

誰の為かなんて、明白だった。

『戦う術を知らない私たちは、あの子の重荷にしかたありません』

何の為になんて、聞くのも愚かだ。

全てはミランのために。水の賢者として認められてしまった自分の枷にならない為に、まだ子供の自分が余計な重荷を負わない為に、進む道を遮らない為に。

「・・・・・・・・僕の、ため・・・・に・・・・」

彼らは覚悟を決めた。全てをその命と引き換えに。

足りなかったのは、自分の覚悟だ。

彼らの方がずっとずっと確かに全てを見通していた。

「そう。けどおまえのせいだとは言わない。ただおまえを愛していたから、選んだんだ。その道を」

泣くまいと顔を歪めるミランをガルクがそつと引き寄せた。広い肩に顔を押し付け、小さな頭をぽんぽんと叩く。

「自分のせいだと責める必要はない。だけど目を逸らすな。彼らの決断から 彼らの覚悟から。泣くくらいなら、根性据えて何が何でも生きて望む道をいつてやるって思え。それが残されたもの・・・願いを託されたおまえがやるべきことだ」

どうか迷わず、為すべきことを

水に沈む直前に祖父が望んだのは、嘆き立ち止まることじゃない。

「　　っ」

伏せた目から涙が零れそうになる。

「泣くか？」

「　　っ」

ガルクの静かな問いに、緩やかに首を横にふって答える。
もう泣くだけ泣いた。

流した涙は、すべて自分の弱さの結晶だ。彼らは泣くことなど望んでいなかった。

だから泣かない。泣くよりも、出来ることがある。

ミランはガルクの肩からそつと顔を離すと、ぎこちなく微笑んだ。
「歌を」

愛してくれた人たちへ、祈りの歌を。

黄昏に目覚める月よ 優しき女神の御許

星空に奉げるは 鎮魂歌

願いましょう 祈りましょう

静寂と眠りのたゆたう この水面で

歌いましょう 祈りましょう
始まりと終わりを奏でる 祈りの歌を

水の中、互いに座り込んだままミランは朗々と歌声を響かせた。
星が隠れ、地平が明るむ黎明の空に。

ありがとうの言葉のかわりに、愛しき人への想いを込めて。

「……………」

目の前で目を閉じ歌っているミランを静かに眺めていたガルクは、
ふいに明るくなった周囲に気が付いた。夜は明けつつあるが、朝日
はまだのぼっていない。

何故かと思いい水の中に視線を落とせば、そこにはぼんやりと青く光
る小さな玉がいくつも自分たちの周囲に集まっていた。驚きのあま
り目を睨ると、その玉は少しずつミランの歌にあわせてゆっくりと
空へとのぼっていく。

その玉を守るように、水の精霊たちがくるくると周囲を回る。

「……………これ、は……………」

不思議とイヤな感じはしない。未知のものだけれど、怖いとも思わ
なかった。

むしろ無性に泣きたくなるくらい、温かくて優しい光だった。

闇夜に旅立つ 愛しき人よ
ならばあなたが迷わぬように
私は灯を掲げましょう

過ぎし日の微笑みを
いつか見上げたあの空を

暖かな想いの光と共に
幸せ祈る 言葉をそえて

私は あなたを送ります

愛しき人よ

私は あなたを送ります

「 「

すべての想いを言の葉にのせ空に放つと、地平から身を乗り出した
太陽が天へと昇る無数の玉を白き光で包み込んだ。

青い青い優しい光は、始まりを告げる光の中に溶け込むように消え
ていく。

目を閉じたままのミランの眦から、ツウと一筋の涙が零れた。

第十九章：過ぎし日の夢

『どうして？どうして貴方が行かなければならないの？』

『私以外の誰が行くと言うんですか』

わざと冷淡に突き放しても、なおもすがりついてきた人。

『でも、約束があるでしょう？なのに貴方は王都に行くの？』

愚かではなかった。見識も広く、己の任をしつかりと全うしていた。ただ情に弱かった。

それだけが、あの人の欠点と言えば欠点だった。

『勿論。約束は守りますよ。というか、約束を果たす為に私は王都へ行かねばならない』

『それが皆を裏切る形だとしても？』

『そうです。例え裏切り者と他の誰に罵られようと、私にしか出来ないことがある』

やんわりと、だが決して翻らぬ意思の込められた言葉に、あの人は溜息をついた。

『それは私では出来ないことなのね？』

『他の誰にも』

微笑んで返せば、目の前の端正な顔が悔しさに歪んだ。

『勘違いしないで下さい。義務感だけで言ってるんじゃないやありません。王都へ行くことは、私の望みを叶える為でもあるのですから』

遠くで誰かが自分の名を呼ぶのが聞こえた。良く知っているその声に我ながら過剰な反応を示して、少しだけ動きを止めた。

喧騒と共に徐々に近付いてくるその声は、やけに必死だ。

『あの子も貴方を止めるつもりよ』

『……知っています。だから、話を妨害されないように見張りを頼んだんですが』

想像以上の速さで迫ってくる声に、少し悔っていたかなと思う。

このままここにいれば、そう簡単には行かせてもらえなくなるだろ

う。

『もう行きます。名残は尽きませんが、どうかお元気で』

二度と見れなくなるかもしれないその姿をしつかりと記憶に焼き付けて、喧騒の迫る扉とは反対側にある窓枠に手をかける。

『……貴方の、願いは何なの？』

震える細い声。振り返らなくても、その声だけで泣いているのだと分かった。

泣き顔を見れば旅立ちにくくなるから、振り返りたい衝動を抑えてまっすぐ外の野原を見つめる。薫りたつ緑の敷布に、望む未来の幻を重ねて目を細めた。

『見たいものがあるんです』

ひとつは、物心ついて己の役目を知ってからずっと見たいと思っていたもの。

もうひとつは、裏切る形になっても王の傍らに行く決めてから、見たいと願ったもの。

これから先、自分がたったひとつ支えと出来るのは、胸に抱くこの願いだけ。

「殿。タブシー殿？大丈夫ですか？」

呼ぶ声にはっと気付けば、金色の髪 of 騎士が木の幹に腰を落ち着けていた自分を覗き込んでいた。

「お加減でも悪いのですか？」

実直な白の騎士は至極真面目に問いかける。フードの下から、心配そうなクリスの表情を見て取って苦笑した。

「いえ。いつの間にか眠っていたようです」

腰を上げて周囲を見渡せば、騎士たちの多くが自分と同じように木の幹に寄り掛かっていた。そういえば昼餉の後の小休止をとっていたのだと思い出して、再び腰を下ろす。

道からわずかに逸れた森の中で休憩を取ると決めたのは、他ならぬ

自分だ。

「…………貴方も座つたらどうですか？」

律儀に傍らに佇むクリスを見上げて座るよう勧めてみるが、ゆるく首を横に振って断られた。

「休める時に休んでおくのは大切ですよ」

「もう休みましたから。それに、結構長く休んでいますよ？急がなくても構わないのですか？」

予想外の言葉に一瞬タブシーの動きが止まる。それを察してクリスは慌てて言い足した。

「あ、いえ。別に急かしているつもりはありません。ただ昨日に比べて長い時間休んでいるなと思つたものですから」

「……………気を抜きすぎましたか……………」

「え？」

「いえ。独り言です。気にしないで下さい」

声を聞き取ろうと腰を屈めてくるクリスにそう言つと、タブシーは座つたまま空を仰いだ。

気候上の問題か、雲が切れることはめつたにない王都ではまずお目にかかれない青空を頭上に認め、その眩しさに目を細める。

覚悟は決めていたはずだが、王都から離れたことで少し油断していたのかもしれない。

だからあんな夢を見たのだと、タブシーは心の中で嘆息した。

*

*

青空の下、細い道を土煙をあげながら、二人をのせた馬が駆け抜けていた。

ふいに腰に回された腕が力を失つたことに気づき、ガルクは馬の足を緩めた。

お世辞にも綺麗に整備されているとは言えない旧い街道の、更に一本道を外れた人気のない道の脇で完全に馬の足を止める。

「・・・ガル、どうしたの？」

背中からミランの不思議そうな声が聞こえた。

「休憩だ。降りるぞ」

無然と言い放ち、腰に回した腕を解かせる。ミランがよたよたと馬の背から降りるのを気配で感じると、ガルクもさっと地面に降り立った。

「さつき休んでから、まだそんなに来てないよ？」

「・・・無理して落馬されるよかマシだ」

ガルクはミランの首根っこをひつつかむと、問答無用で木陰に座らせた。

「・・・そんなに運動神経悪くないよ」

「そういう問題じゃない。物を食えなくなつて、体力が激減してるんだ。その状態で今迄と同じことをしようとしても出来るわけねーだろうが」

「大丈夫だよ。それより早くガルの村に行かないと・・・」

自分で気付いていないのか、真つ青な顔をして立ち上がるつとするミランをガルクは上から押しとどめる。

「休め」

「だからそんな場合じゃないでしょ！やらなきゃならないことがあるんだか・・・」

「・・・チツ、このバカが」

苦虫を噛み潰した顔をして、ガルクが右手に力を込める。再度立ち上がるつとしたミランの首筋を、次の瞬間ガルクの手刀が突いた。何が起きたのかをミランが理解する前に、彼の意識は闇に沈み、ぐらりと傾いだ身体は地面に倒れた。

ガルクは溜息をついてから、昏倒したミランの身体を抱え、再び馬上に腰を落ち着けた。

本当ならきちんと地面で休ませてやるつもりだったのだが、こうな

つた以上地面であろうが馬上であろうが一定時間経つまで目覚めない
ので、少しでも早く村に着く為にこのまま抱えて走ることにする。
急がなければならぬのは事実なのだ。

「・・・軽い」

苦々しげにガルクは呟いた。いくら元々華奢だとは言え、完全に気
を失った人間の身体がこんなに軽いわけがない。

ガルクはミランを落とさないように注意しながら、速度を抑えて馬
を走らせた。

「・・・」

今回で何回目か。もう数えるのも面倒になつてしまった。

泣くよりもすることがあるのだと言いつつ切ったミランは、確かにその
後ガルクの前では泣かなくなった。むしろ表情豊かによく笑う。

こんな子供のどこにそれだけの強さがあるのかと感心したが、すぐ
に異変に気が付いた。

まず物を食べなくなつた。少量であれば無理矢理飲み込んでいるが、
それでも成長期の少年が食べる量としてはあまりに少なすぎる。

一度強引に食べさせようとしたが、すぐに吐いた。

完全に身体が拒絶してしまっているのだ。

精神的ストレスによるものだということは分かったが、かといって
どうすることも出来なかつた。食事を摂る回数を増やして、少量ず
つ食べさせるくらいしか方法はない。

だが問題はそれだけではなかつた。フスク村跡を出発して最初の晩
から、ミランはほとんど寝てなかつた。眠ろうとして、途中で魔さ
れて起きるのだ。

『ごめんなさい・・・ごめんなさい・・・』

夢現の状態で苦しそうに呟くと、次の瞬間には汗だくになって飛び
起きる。

息を乱して怯えるミランは、その度に横に眠るガルクの姿を確認し
てほっと息をつく。自分はまだ一人じゃないのだと、何度も何度も
確かめる。

そしてそのまま眠れぬ夜を明かす。勿論ガルクは最初の晩からそれに気付いていたが、自分も一緒に起きていようとするとミランが痛々しい顔をするので、気付かぬ振りで眠っているしかなかった。

第二十章

こういう時は自分は本当に役立たずだ。

改めて気付くと少し情けなくなつて、ガルクは渋い顔をした。

元々火の民自体人の機微には疎い性質だが、ちよつとやそつとじゃ傷つかないタフな精神をしているせいで、繊細すぎる精神をもつた水の民の心が理解できない。

理解できないから、慰めようもない。

だからこういう場合必要なのは、自分じゃない。

「……必要なのは、不敗の剣 か……」

無意識に呟いた言葉を聞きとめて、ガルクは不快そうに眉根をよせた。

あの騎士が本物の 不敗の剣 かどうかなんて、調べるまでもない。自分とは絶対に相容れないと感じた己の感覚が、彼の騎士が本物だと告げている。

絶対にあれは本物だ。

「……なのは何で、あんなところにいやがるんだ……」

本来在るべき場所はこの子供の傍らなのに。間違つても敵対するかもしれない位置になど、いいいいはずがない。

水の賢者と常に共に在った 剣。

あらゆる害から守り、守られ、他の誰にも断ち切れぬ深い絆で繋がる存在。

誰よりも何よりも、傍で支えてやる事が出来るのに。

考えれば考えるほど腹の底から湧き上がってくる怒りに気付き、ガルクは舌打ちをした。

イラつく気持ちを振り払うかのように、無意識に馬を駆ける速度が上がった。

*

*

透き通るほど白い腕がついと上空へと伸ばされた。

そして数秒も待たぬ間に、その腕の先に一羽の鳥が降り立った。チチとさええずる声に耳を傾け、銀髪の少女はわずかに頷く。

「分かった。ありがとう。あなたは彼らを誘導してあげて」

少女の声に応えるように鳴くと、鳥は再び空へと舞い上がった。

風に乗って南へと進路をとるその影を追いかけた後、少女は自分の周りを回り続ける精霊たちに目を向けた。

「あなたたちも水の賢者が心配なのね。いつもより騒がしいわ」

そう少女が言うと、肯定するように突風が上空へと舞い上がった。

風の眷属である鳥の言葉を精霊たちも理解して、その知らせの内容にひどく心揺れたようだ。

風に煽られた長い銀髪を手櫛で梳くと、少女は身を覆うフードを深く被りなおした。

「本当なら 剣 の役目だけれど……今は、彼にお願いした方がいいと思うの」

ここより遙か南方の地にいる賢者たちのもとに行くのを待ち望む風の精霊たちを仰いで、少女は微笑んだ。

「行って、伝えて。エンリルに。水の賢者に立ち上がるキツカケを」

そして示された指先の向かう方角へと突風が駆け抜けた。

*

*

風が叫びを運んできた気がした。

予告もなく突如吹きすさぶ風が耳元でうなるのを聞いて、少年はふ

と顔をあげた。

雲のない夜空に半月が綺麗に輝いているのが見える。

「……………アイオリア？」

ぼそと口に出した後で、少年はすぐさま己の口を掌で覆い隠した。身動きもせず気配だけで後ろを伺うが、規則的な寝息が聞こえてくるだけで同行者が起きた気配はしなかった。それでも警戒をとかず静かにしていると、もう一度、今度は優しく風が耳元をすり抜けた。風に煽られた焚き火がぱちつと火の粉を爆ぜる。

揺れる火の明かりに照らされて、少年の茶色の髪と瞳が金色の光彩をまとうているように見えた。

「……………そう……………か……………」

少年は風の運ぶ伝言を正確に受け取った。

そしてそれ以上は何も言わずに自分の目の前に浮かぶ風の精霊に微笑み頷いた。

承諾の代わりに。

風は答えを受け取り、北の空へと舞い上がる。遠く駆けていく精霊の姿を月明かりの下で追いながら、少年は沈鬱な面持ちで右手を肩の辺りまで持ち上げた。

するとその動きに導かれるように、何も無いはずの地面から茶色の毛並みの狼が飛び出した。少年は狼を一瞥しその頭を撫でると、自らのいる場所から東の方角を指差した。

狼は声なき恭順を意を示すと、颯爽と夜半の森を指差された方角へと向かって走り出した。

第二十一章

濃い霧の中ミランはその場に立ち尽くしていた。

自分が何処にいるのかも、何をしていたのかも分からない。

「・・・・・・・・ここは・・・・？」

人の気配もないことに気付いてミランは辺りを見回した。

「ガル？」

いつも一緒にいてくれるはずの赤髪の青年の姿が見えない。

焦って、けれど何かが腑に落ちなくてミランは首を傾げた。

いつも一緒にいてくれた。

けれど、いつもとはいつのことだろう。いつから一緒にいたのだろうか？

宙を見つめたまま動かなくなったミランの周りで、濃い霧が一斉に動いた。

閉ざされていた視界が一気に開ける。

「・・・・・・・・ここ・・・・は・・・・フスク村・・・・」

見慣れた緑と水の豊かな村の姿にミランは安堵の息を吐いた。

わいわいと賑やかな声があちこちから聞こえてくる。

「おう、ミラン！もうすぐ舞台が完成だぞ！」

「今年は隣村だけじゃなくて、大陸よりの村からも見に来る人がいるんだってさ。嬉しいねえ」

「ミランお兄ちゃん、おどるの？一番前で見るね」

「あ、おい。これさつき採れたんだ。祭りの準備でろくなもん食ってねえだろうから、腹へったら食べな」

「ねえミラン、衣装の縫製私も手伝ったのよ。期待しててね」

歩くたびに向けられる声と笑顔に、ミランも笑顔で返した。

そうだ、確か自分は祭りの準備をしているはずだった。

水枯れの酷くなってきた土地に雨を降らすために、水の精霊の力を借りれる自分が踊り手に選ばれたのだ。

村の中央広場に立てられた舞台を見上げ、ミランは目を細めた。

『ようやく見つけました。水の賢者』

だが背後から唐突にかけられた声にびくりと身体が震えた。

聞いたことのある声。凜とした、それでいて優しげな声。

だけどその声に答えて振り向くのが、何故かとても恐ろしい気がする。

『応えようが、応えまいが、行き着く所は同じなんじゃよ』

硬直するミランの後ろ姿に更に別の声が投げかけられる。

「じいさまっ！！」

その声の主が祖父のものだと分かった瞬間に、ミランは後ろを振り返った。

視線の先には、白い軍服の金髪の青年と祖父が並んで立っている。

いつの間にか周囲の音は消え、人の姿もなくなっていた。

『力をお貸し下さい。水の賢者としての稀なる力を。我が王がウシ

ユク・ベーハーと世界の覇権を望んでいます』

金の髪の青年は淡々と言葉を紡ぐ。

「・・・・・・・・ク・・・・・・・・クリス・・・・・・・・さん・・・・・・・・？」

にこりとも笑わない青年の視線がミランの心に突き刺さる。

喉が枯れてひきつり、声が出ない。

『ミラン覚えておきなさい。儂らはおまえを愛しておるよ。だから

おまえが思う道を行きなさい』

青年の隣で祖父が柔らかに微笑む。

『選びなさい』

二人に口を揃えて言われて、ミランは悲痛な顔で頭を横に振った。

選べない。選びたくない。

『選びたくないのか、行く道？』

今度は縦に首を大きく振った。

『それは行き着く先を知っているからですか？』

静かな問いかけがやけに耳に響いて、ミランはぎくりと身体を縮め

た。

『選んだ先の未来に、あなたの望む平和はないと知っているからですか？一人で置いていかれる恐怖を知っているからですか？』

優しい声のはずなのに酷く胸に痛い青年の声に、ミランは涙ぐむ。

『けれどおまえは選んだはずじゃ』

祖父の鋭い声と共に、村は突然炎に包まれた。

今の今までいなかったはずの人が必死で逃げ、武器を持って戦っている。

静寂は嘘のように喧騒に破られた。悲鳴と炎と金属音が大気に満ちる。

青と緑が調和する美しい村が、赤に染まった。

「やめて！！やめて！嫌だ！嫌だよ！！」

咄嗟に叫んで駆け出すが、その手には何も掴めない。

『あなたが選んだ結果だ。私たちは違う選択肢も用意していた。けれどあなたはこうなることを選んだ』

「違う！こんなの望んでたわけじゃない！」

『選んだ選択肢がどんな結果を生み出すか想像出来なかったのだとしても、その無知すらもあなたの責任だ』

事実を突きつける声にミランが息を呑んだ瞬間、周囲の音がやんだ。代わりに地を揺るがすほどの轟音が耳を劈く。

もはやクリスも祖父もミランとは遠い場所にいた。

「やだ！いやだ！行かないで！」

あらん限りの大声も轟音にかき消される。

一瞬の間に迫ってきた青い壁に、赤に包まれた村は丸ごと呑み込まれた。

「置いてかないで！みんな！行っちゃ嫌だ！！」

視界がブラックアウトした瞬間、ミランははっと目を覚ました。

遠く視線の先に木々の間からわずかに星空が見え、困むように見下ろす木々が闇を深くしていた。がばりと勢いよく起きあがると、ミ

ランは周囲を見回した。

暗闇を照らす焚き火の明かりが、ミランの反対側で寝ころんでいるガルクの姿を浮き上がらせる。

どうやら自分はまた気を失って運ばれていたらしい。

これまで何度も記憶が不自然な所で途切れていて、そして気がついた時は大概夜になっていて地面に寝かされていた。

今回もまたガルクに余計な負担をかけてしまったようだ。

そのことに気付き情けない気持ちになると、急に嘔吐感が襲ってきた。

慌てて火の明かりが届かない木の根本に駆け寄ると、抑えきれずに吐いた。

けれどろくに物も食べてないせいか、胃液くらいしかこみ上げてこない。

つんと鼻につく匂いと気持ち悪さ、喉の苦しさでミランは顔をしかめた。

まだ胸の辺りにわだかまる感覚が残っており、どうしたらいいものかと思っていたら、背中に暖かな感触がした。

「まだ楽にならないか？」

「ガル・・・？ごめん、起こしちゃった・・・？」

「最初から起きてた」

しかめ面で返されてミランは力なく笑った。

「でもうるさくしちゃったね・・・ごめん・・・」

「そんなの気にしなくていいから、全部吐いちまえ。そしたら少しは楽になる」

背中をさする手が温かくて優しくくて、ミランは少し泣きそうになった。

全部吐き終わって水で口をゆすぐと、足下がおぼつかない感じであれよれと焚き火の傍に座った。そのすぐ隣にガルクも黙って腰を下ろす。

「吐くのも体力がいる。疲れたんだろうから、さっさと休め」

乱暴だがミランを気遣う言葉に、ミランは微笑んだ。

「うん。でも、今はちょっと起きてたい……」

肌寒いわけではないが何故かお腹の奥の辺りが冷え冷えとしていたので、ミランは毛布にくるまって膝を抱えて座った。

「ガルは疲れてるでしょ。寝たほうがいいよ?」

「……一日くらい寝なくても問題ない」

仏頂面であぐらをかくガルクにミランはまた微笑んだ。

「一緒に起きてくれるんだ?ありがとう」

「……」

いつもは自分のせいでガルクが眠れないのは非常に嫌なのだが、今日は見た夢があまりにもリアルで恐ろしかったせいで、傍に誰かがいてくれるほうが安心する。

目を瞑っていても感じる気配が、自分が一人ではないことを教えてくれる。

「僕、何か言ってた?」

「……何も」

嘘だと言うことは分かったが、今は素直にガルクの優しさに甘えておくことにする。

ぼんやりと炎を見つめっていると、やがてガルクが珍しく言い出しにくそうに口を開いた。

「泣くなとは言ったが、無理してまで笑えとは言っていない」

「……難しいよ」

唐突な言葉に一瞬目を丸くしたが、ミランはすぐに苦笑した。

自分では強がっているのかすら分からない。きっと強がっているのだろうけれど、それでもしれなければ立っていることも出来ない。

「オレは何て言っているかわからない……傍にいるしか出来ない」

「……充分だよ。ありがと、ガル」

本当に今のミランには充分すぎる言葉だった。

ただ同じ賢者というだけで、かつての火の賢者と水の賢者の間で交

わされた約束があるというだけで、傍にいてくれるのは勿体ないくらいだ。
本当ならミランを放って自分の村に行ってもいいのだ。むしろそれが当然だ。
それでも傍にいてくれることがミランにとってどれほど救いになっているか、ガルク自身には分からないだろう。
けれどやはり心の奥深くに沈んだ、自分でもどうしていいか分からないモノがミランを苛み続ける。
夢の中のクリスが放った言葉がいつまでも耳にこびりついて離れなかった。

*

*

南下するにつれ徐々に酷くなる耳鳴りにクリスは顔をしかめた。

城を出た時はなんともなかったのに、いつの間にか聞こえ出した耳鳴りは何かを訴えるようにクリスを苛んでいる。

タブシーが厚い布の隙間から窺うように視線を向ける。

「またですか？」

「あ、いえ、申し訳ありません」

「何を謝っているんですか。生理現象でしょう、当人の意思でどうにかなるものではありません」

タブシーは呆れたように言い、クリスに背を向けた。

クリスはその背を見ながら、再び襲ってきた耳鳴りに目を瞑って耐えた。

タブシーは振り返ってクリスの様子を確認すると、何かを探すように視線を泳がせた。

「……近付いてますね……」

「……え？」

「いえ、独り言です」

タブシーは後ろで隊を率いていた副隊長を呼んだ。

「今日はもうここで野営をします」

「先には進まないのですか？」

「進路上に若干問題が生じたようでした、無理に進むと隊に支障が出ます」

偵察を出したわけでもないのに、まるで見てきたかのように語るタブシーにクリスも副隊長も異を唱えなかった。

副隊長はただ首肯すると、己のなすべきことをするために隊の中へ戻って行った。

「貴方は、しばらく一人で休んでいなさい」

「そういうわけには……」

「誰かと一緒にいては、ソレは治りませんよ」

「？」

「治せるとしたら、それはたった一人にしか出来ないことです」

そこまで言われてようやくクリスは、耳鳴りのことを言われているのだと気付いた。

そしてそれは、自分が 不敗の剣 であることに関係しているのだということも。

「あるべきものが、あるべき場所へ行こうとする、それは自然な反応です。それを拒絶すれば当然反動がきます。出会う以前はともかく、今の貴方は本来あるべき場所である水の賢者の傍らにたつことを知ってしまった。その耳鳴りは貴方の魂が発する警告ですよ」
「あるべき場所へ還れというね。」

静かに、ただ静かに諭すように声は告げる。

「……ある……べき……場所……」

『還るべきですよ、君は。君のあるべき場所へと。そしてそれが、彼が望むことです』

「・・・あ、れ？」

同じようなことを、昔誰かに言われた気がする。

『オレは、オレにしか出来ないことをする。それがきつとの助けになる』

そしてそう答えたのは、自分。

けれどそれは、いつのことだったか。

「　　」

くらりと眩暈を覚えて、クリスは咄嗟に手近な木に手をつく。

その様子を静かに見守っていたタブシーは、しゃがみ込んだクリスの額にそつと手をかざした。

「眠りなさい、今は」

かざされた手が温かいと感じると同時に、急速に瞼が重くなった。

「次に目覚めた時には、少しは楽になるはずです」

呟きのような小さな声を最後まで聞く事無く、クリスは心地良い眠りの中へ落ちていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3798a/>

マグ・メル～約束の国～

2010年11月23日05時41分発行